

# 求道

第拾五卷  
第貳號

十月號

信仰の徹底及び人生と彼岸との交渉  
寂 靜 と 應 現  
選擇本願の行信——『正信偽講話』  
池山氏獨譯『歎異鈔』序文

大正八年十月二十日發行（毎月一回廿日發行）



○一往此の如く説くことは、眞宗の徒は是亦當然のこととして、漫然意を留めぬ次第である。従て眞宗は淨土往きの宗旨であつて、還相廻向は極樂の景物位にか考へて居らぬ。往相にせよ還相にせよ、氣のない考へ方をして、汽車の往復ぐらゐにししか思ふて居らぬ。甚だ以て不眞面目にして、且つ淺薄である。實に往相還相の廻向といふは、實驗的に味へば味ふ程、深刻なる信仰の極致と、嚴肅なる人生觀とを齎すことを感ぜずには居られぬ。

○試みに左の數首の和讃を誦して、其餘韻如何に嬌々たるかを仰ぎ奉るべきである。

彌陀の廻向成就して

往相還相ふたつなり

これらの廻向によりてこそ

心行ともにえしむなれ

往相の廻向とくことば

彌陀の方便ときいたり

悲願の信行えしむれば

生。死。す。な。は。ち。涅槃。なり。

還相の廻向とくことば

利他教化の果をえしめ

すなはち諸有に廻入して

普賢の徳を修するなり。

淨土の大菩提心は

願作佛心をすゝめしむ

すなはち願作佛心を

度衆生心となつたり

度衆生心といふことは

彌陀智願の廻向なり

廻向の信樂うるひとは

大般涅槃をさとるなり

如來の廻向に歸入して

願作佛心をうるひとは

自力の廻向をすてはて

利益有情はきばもなし

彌陀の智願海に

他力の信水いりければ

眞實報土のならひにて

頻伽菩提一味なり

如來二種の廻向を

ふかく信するひとばみな

等正覺にいたるゆへ

憶念の信はたへぬなり

彌陀智願の廻向の

信樂まことにうるひとは

攝取不捨の利益ゆへ

等正覺にいたるなり

如來の作願をたつねれば

苦惱の有情をすてずして

廻向を首としたまひて

大悲心をば成就せり

眞實信心の稱名は

彌陀廻向の法なれば

不廻向となつてぞ

自力の稱念きはらふ、

彌陀智願の廣海に

凡夫善惡の心水も

歸入しければすなはちに

大悲心とぞ轉するなり

往相還相の廻向に

まうあはね身となりせば

流轉輪廻もきばもなし

苦海の沈淪いかせん

無上涅槃を期すること

如來二種の廻向の

恩徳まことに酬しかたし

南無阿彌陀佛の廻向の

恩徳廣大不思議にて

往相廻向の利益にば

還相廻向に廻入せり

往相廻向の大慈より

還相廻向の大悲をう

如來の廻向なかりせば

淨土の菩提はいかへせん

彌陀觀音大勢至

大願のふれに乗じてそ  
生死のうみにうかみつゝ  
有情をよばふてのせたまふ

佛智不思議の誓願を

聖徳皇のめぐみにて

正定聚に歸入して

補處の彌勒のごとくなり

救世觀音大菩薩

聖徳皇と示現して

多々のごとくすてずして

阿摩のごとくにそひたまふ

無始よりこのかたこの世まで

聖徳皇のあはれみに

多々のごとくにそひたまひ

阿摩のごとくにおはします

聖徳皇のあはれみで

佛智不思議の誓願に

すゝめいれしめたまひてぞ

住正定聚の身となれる

他力の信をえんひとは

佛恩報せんためにとて

如來二種の廻向を

十方にひとしくひろむべし

大悲救世聖徳皇

父のごとくにおはします

大悲救世觀世音

母のごとくにおはします

久遠劫よりこの世まで

あはれみましますしるしにば

佛智不思議につけしめて

善惡淨穢もなかりけり

和國の教主聖徳皇

廣大恩徳謝しがたし

一心に歸命したてまつり

奉讃不退ならしめよ

上宮皇子方便し

和國の有情をあはれみで

如來の悲願を弘宣せり

慶喜奉讃せしむべし

多生曠劫この世まで

あはれみかふれるこの身なり

一心歸命たへずして

奉讃ひまなくこのむべし

聖徳皇のおあはれみに

護持養育たへずして

如來二種の廻向に

すゝめいれしめおはします

○知らず識らず澤山の和讃を拔萃したが、是亦常に拜讀するものは、慣れすぎて感覺が鈍くなつて居るが、仔細に熟誦玩味し來れば、髣髴として聖人の如來二種の廻向の大法輪が、縦横無盡に轉せらるゝことを認めらるゝ。

○信仰の中心樞軸として最も鐵仰に堪えざる點は、抑々往還二種と云ひ、亦入出二門といふことは、信仰の徹底と其反映とを顯はしたるものである。即ち極所に往き盡して忽にして還り、家に入りて宅屋を極めて藪林に出で來るのである。而も此關係を人生と彼岸との間に説きたるが、親鸞聖人の信仰が深刻にして、且つ嚴肅であるといふ所以である。

○先づ親鸞聖人が往相の廻向を説かるゝとき、必ず信心開發の一念に煩惱即菩提、生死即涅槃を説かるゝのである。正信偈にも能發一念喜愛心、不斷煩惱得涅槃といひ、惑染凡夫信心發、證知生死即涅槃とある。即ち大乘の眞髓を、信の一念に徹底せしめらるゝ味は、實に壯快を極められて居る。固より無上涅槃は彼岸に期せらるゝも、而もかくなるべき徹底味は一念に體得せらるゝのである。是現生正定聚を極説したまふ所以である。是れ他の淨土門の如く品位階次を論ぜず、速疾に無上正眞道を超證する所以である。隨て淨土に於て修行するにあらずして、願土に至れば、速に無上涅槃を證して、即ち大悲を起す所以である。

○此の如く一念徹底を説かるゝにも拘はらず、現在に於ては恩愛甚だ絶ち難く、生死甚だ盡き難くして、愛疑の二心は臨終まで止まぬものである。然れども佛かねてしるしめして、煩惱具足の凡夫火宅無常の世界と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくの如きの我等が爲なりけりと、何等の障礙をなさぬが、不斷煩惱得涅槃たる所以である。

○然るにも拘はらず現世に於て佛性眞如を説かずして、最後まで名殘惜しき恩愛絶えざる凡夫たることを示されたるは、實に我等が人生の深刻なる悲哀を説かれたのである。而して臨終の一念に於て無上上、眞解脱の境に達して、無愛無疑の涅槃を體得したるとき、眞實の大慈大悲の衆生濟度が實現さるゝのである。是彼岸に、輝ける無量光明土を仰ぐ所以にして、此時初めて盡十方無碍の光明に一味にして、一切の衆生を利益し得るのである。

○禪家に於て廻光返照の徹底味を、現在悟後の生活に説くも、親鸞聖人は還相廻向體現を未來に置かれたるは、深刻なる生死を示して、淨穢二土の區別を明らかせられたのである。

○管に此の如く往還を説きて深刻なる死の關門の通過を極言せるのみならず、還相廻向の反射は、我等が現在生活の中に普賢の徳を現さるゝといふ、嚴肅なる人生觀を持來すことになる。殊に前記の聖徳太子奉讚

の如きは、著しく其色彩の濃厚なるを窺ふべきである。此に於て彼岸の光明は、現在の人生に反射して、大莊嚴を來すことになる。然れども其目的たるや決して人生の常樂我淨を快ましむるためにあらず、寧ろ顛倒の善果を齎へして、如來の大慈大悲に歸入せしめたまふ彌陀の方便である。利他教化の益である。聖人が本師聖人即勢至の化身、太子亦觀音の垂迹なり、此故に我二菩薩の引導に、して、如來の本願をひろむるにありと仰せられたる所以である。

○是聖人が如來二種の廻向によりて信行を得、亦無上涅槃を證することを感謝すると共に、亦二種の廻向を十方に弘むべしと仰せらるゝ所以である。特に聖徳太子奉讚に於て其眞相を告白して、太子が聖人を導きて二種の廻向に歸入せしめらるゝことを感激したまふこと極りない。近時兒常聰の示寂に遇ひ、如來無限の恩徳を感謝するの餘、勿々の間所感の一端を披瀝し奉る次第である。

## 寂 靜 と 應 現

近 角 常 觀

### 一 涅槃寂靜の眞實證

七月には六日より十三日まで夏季求道會を開き、今年は「教行信證」證卷を講本として、親鸞聖人が示された、我々がこの人生を畢りて、涅槃の證に入らせて貰ふ、その證のことを話させて貰ふたことであつた。

これは佛敎としての、彌々の

最後の理想がこの涅槃なることになるのである。

寂靜はその涅槃の境界に入つた有様が即ち寂靜である。「正信偈」には

速に寂靜無爲の樂に入ることは、必ず信心を以て能入とすといへり。

即ち我々が彌々この生を終はり、有らゆる煩惱も無くなりて、廣大なる佛の眞實證の證の境界に往かせて貰ふ、その界のことである。即ち我々の日常生活は、是非善惡、幸不幸、喜び悲みの、何處迄も火宅無常の迷

この世界であるが、斯くこの界が迷ひに迷ひを重ねて、果てしなき人生なることを哀れみ給ひて、この煩惱、苦惱の者をば何處までも見捨させられぬ佛の御眞實なることが頂ければ、その一念から廣大なる恵みに救はれて、自己の計ひ心の必要が無くなり、此の世ながら攝取不捨の光明中の生活をさせて頂く。それが他力の要であることは、もとよりであるが、併しこの肉體の存し、業報の生きて居る限りは、未だ眞實の證とはならぬ。彌々肉體が減びて、眞の佛の證りに入らせて貰うた、その時が眞實證と、このことを詳しく話させて貰うたのであつた。而してひと度びこの眞證の境界に目醒されて見れば、此の度びはこの人生に夢みて居る我々の境界——無明の酒、三毒の毒に酔ひしれて居る有様が哀はれむ

可き故、この度びは、その界より再び人生に姿を現じ、迷へる我々に種々なる方便、手引を仕て下さることになると、このことを今年度講本『證卷』中には、丁寧にお知らせ下されあつたのであつた。而して今茲に、斯くこれを持ち出して話したのは、實は今夏求道會八日間に聞いて頂いたそのことが、この夏に於ては、私一身上の事實となつて現はれ、恰も會にて講本を以て頂いたそのことを、現在只今にては、現前の事實として知らせて貰うて居るから、そのことを聞いて頂かうがためなのである。

## 二 愛兒の夭折

それは御承知下さる方もある如く、私の末子常聰——恰も昨年昨日生れたのが、求道會終ると間も無く病氣になり、夏中種々の手當てを盡くしたのであつたけれども、終にこの八月廿六日を以て、亡くなつたのであつた。その爲め今夏は一旦は傳道に出かけ、大阪、岡山に立寄り、四國高松では五日間話し、それより九龍を経て、九州別府に渡つた處で急電に接し、その儘引き返して來たやうのことである。

悟決めてた間が長かつたので、そんな氣持ちで歸つて來た。早速病院にゆくと思つたよりは腦膜炎の症狀らしきが和いてあつたのと、且つ病氣は腎盂膀胱炎のこととて、單純なものならば希望があるとのこととて、喜んで居た。すると三十日三十一日になつて非常の發熱となりし故、重きに係はらず喜んで居た。幸に一日以後は次第に熱下り、快方に運んで來たので喜んで居たのであつたが、併し然ういふにも係はらず如何にも元氣が無く、何處か中心確り仕て來ぬといふ状態があつて、且つ嘔氣、食欲不振等、様々の現象を起し、何うもはつきり仕なかつたやうである。併し醫師の方ではもう茲までになり、且つ急に快くなる病氣では無いから、歸つて靜養することに仕たらとのことで、二十一日に退院し、連れて歸つて來たら小供は非常に喜んだ。がその夜少しく激しき嘔氣を起し、それより翌日翌々日と、何うもよく無つたやうである。して二十六日夜九時五分、終に亡くなつたやうのことであつた。即ち私としては斯くの如き出來事があつて、今日は既に二七日退夜と

これは個人上の事を聞いて頂くも何うかと思ひますけれども、私今夏は今いふ如く求道會で色々話し、會期中も極めて忙がしく、立つ時も殆ど一家話し合ふ丈けの暇も無く、一寸抱いてやる丈けの暇も無く立つてしまつたやうのことであつたが、私の出立後間も無く病氣になり、一旦は腦膜炎の疑ひがあつて、私はそれ聞いて飛んで歸つて來たやうのことであつた。恰も別府で七月廿七日の晩、これより話さうとして居るそこへ電報が届いて、私は見るなり一席話して、「兼ねてより言うて居る人生無常の有様、今この電報が來たのでも分る。この生れ、死にする生死の苦境を哀れみ、何處迄もお見捨て無き御眞實。之に夜が明ければこの慈悲に隨つて、終に寂靜無爲の樂にまで入らせて貰ふのが有難い。」斯く話してその儘立つてしまつたのであつた。その時は腦膜炎といふの故「今夜あたりは死んで居るであらう。幸に存命してゝも、再び間に合ふ人間にはなり得まい。」斯く考へつゝ、非常の速力で歸つて來たのであつたが、途中汽車中にて神戸、濱松にて電報受取り、次第に余り心配入らぬと聞いて凡情に歸り、喜んで歸つて來たものゝ覺

なり、あとより考えれば萬事が夏中に片ついて、又斯く皆様とお目に懸るやうになつた譯けである。即ち今夏『證卷』を講本として話させて貰うた事柄をば、今度は斯くの如き出來事で、事實の上で知らして頂くことになり、通じて考えれば、夏季求道會の講義からが、斯くの如き因縁があつて、斯くの如き出來事で寂靜無爲の味ひを知らして頂かうが爲め、その準備、手引きとして話させて貰ふて居つたかの如くに思はして貰ふ次第である。

これは併し私自身のことであるが、皆様の中には同じく求道會に出て居て、この種御縁に遇はれた方も有らうし、又出無くて遇はれた方もあらう。何にしても聖人のお示し下さる眞實證の御教化が如何にも有難いと思はして貰ふのである。

## 三 父の示寂によりて示された眞實證の靈境

それに就き順序立てては申され難い故、思ひ出す儘に——それは『慈光錄』にあるが、十數年前父を失うた時に、父の示寂によつて眞實證の靈境を教えられたと感じたことがあつた。今朝も『慈光錄』でそれ見て非常に喜

んだと、或方の話であつたが、それは私のは人生もろく／＼の苦惱に苦んで、如何にもこの仕方が無いのを哀はれみお見捨て無き慈悲と知らされて、その一念に恵みの中に攝取され、此の世ながら慈悲の懐に入つた經驗をしたこと故、嘗つて

私の頂いた時の思ひは、敢て極樂を頼みにせぬては無つたけれども、敢て未來を待たず、現在に於てお慈悲の中の生活と喜んだことであつた。が彌々親か病氣となり、何とかして助け度いものである——恩を受けた親の死に目に急電に接してとんで歸り、侍すること三日、力盡きて何とも仕やうが無い。その時に『歎異鈔』の

慈悲に聖道淨土のかはりめあり。聖道の慈悲といふは、ものをあはれみ、かなしみ、はぐ／＼むなり。しかれどもおもふがごとくたすけとぐるときはめてありがたし。(四章)

この文に泌み／＼感じたことであつた。如何にも人力を以て助けんとするも、思ふ如くに助け遂ることは有り難い、如何にも思ふやうにならぬ世の中である。然るにこの世の中を、佛力で

思ふ如く人にも慈悲出来るかの如くに思ふたが、現に斯く力盡くして何にもならぬとすると『思ふが如く助けとぐる』こと有りがたし』はこれである。如何にも思ふ如くには一分一厘も助けられぬ、小慈小悲も無き身であることを知らして貰ふたことであつた。それが彌々命終られた時、佛の淨土に迎えとられて、往生させて貰はれる状態を選に此方から見せて貰つたと感じた時『親戀聖人が『教行信證』中に、眞實證を言はれるは正に茲である。如何に慈悲喜ばうが、光明中に包まれて居やうが、此の世に在る間は思ふやうにならぬ。然るにその仕て見やう無きを何處迄もお見捨ての無い慈悲に攝取されて、斯く往生させて貰はれたとは』と。それで彼の『父の示寂によりて示されたる眞實證の靈境』なる文章は、このことを教えて貰うたことを書いたのであつた。

それは十数年前のことであるが、その後色々考え來ると、直ぐその翌年の暮には私の長女、生後六十日ばかりの者であつたが、それが亡くなつた時には、幼児であつたに係はらず、私は非常に悲しんだ。彌々棺に納めて聖人の『和讃』を拜讀し、

彌陀觀音大勢至 大願のふねに乗してぞ、

生死のうみにうかみつゝ有情をよばうてのせたまふ如何にも斯くの如き生死の海に姿を現じ、

無常の様を示して親を濟度して呉れたと、その思ひが胸に泌み込んだことであつた。その感じはその後多くの子を失はれた方に話して、喜んで下されたこと數を知らぬ。處が今度はその後十數年を隔て、再び子供を失ひ、且つ永年『教行信證』を話して今年恰も『證卷』に至つた時、又々そのことを知らして貰つたといふ譯である。

#### 四 第一に心に釘打たれたことは

そこで今度知らされたこと澤山あるが、先づ第一心に釘打たれたこと、又聞いて頂かうと思ふことは、平日より話すことで、如何なる場合にも之れ言はぬことは無けれども、今度は明に實地として知らして貰うたものがある。それは我々人間力で『斯うも、あゝも』と、所謂親の子を思ふ情の上より、又分別し思慮する上より、種々様々に心を用ゐることであるけれども、結局人間力では思ふやうに一分も一厘もならぬといふ、こ

れてある。こは兼ねて私としては百も二百も承知のこととて、殊にこの度びは急の發病であつたに係はらず、遠方に居て電報で知り、急に歸京して一ヶ月も介抱が出来たのであるから、人生として不足いふべきで無く充分手は盡くされて譯けてある。人生として手は盡くす丈は出来たのであるから、それで満足することが出来るかと思つてみるに、それが残らず空しくなつたのだから、満足することは出来ぬ。すると結局最後に何を氣付かしめられたかといふに、人間の愚痴としては『斯うもあつたら、あゝもあつたら』と思ふことであるけれども、人間の力としては思ふやうになるもので無い。成る可きやうになる譯けてある。而もその譯けは、然かなり行く可きやうに、一分一厘まで前の世から決つて居るのである。我々の業報で、あれはあゝなる可き譯け、それはそういかぬ譯けと、佛のお手許では初めからチャンと決つて居るのであるといふ、茲が聞いて頂き度い點である。

これは有りやう言ふと、色々手を盡くしていけなくなつた後に悟つたのでは無い。既に九州で電報受取つ

た時には、先きいふ如く之より講壇に登らうとする、その時第一の腦膜炎との電報を受取つたのであつたが、その儘手にして演壇に登り、

「諸行は無常なり、是れ生滅の法なり。……」とは、現に斯く言うて居る私が、斯の電報を受取つて居ることである」と、既にその時から追弔の講話仕て仕まつた譯けてあつた。又平日より當てにならぬとは常に聞いて頂いとつたところであるが、それがこの度は自身の上に事實として起つて來た故、殊に著しく知らされたといふ譯である。

### 五 子供を失はれた方に

「あゝ、あの時斯うもあつたら、あゝも出來たら——」それは私も思ひます。併し「然うなるとよかつた」は、結局あどより言ふことで、それがその時は、そうなり得無つたが事實である。それは思ふさま出來得る人間力があるなら何とも言はれやうなれども、抑々不完全なる人間、思ふさまならぬ世界。故に何處

説き下さるとは無つたのである。そこでそこが思ふやうにならず、何うにもなり得無い、その様を解脱の本覺明了の境界より御覽下さると、その爲め色々の苦惱を重ね、愛著か止まら無いて苦しんで居る。その状をば哀はれみ思召し下され、茲に廣大なる大慈大悲を以て、その者をば何處々々迄も捨てぬといふ眞實が現はれ下されたが、お慈悲といふことなのである。

### 六 生きやうと死なうと佛の御計ひ

そこで第一の電報を受取るなり、直ぐ私の頭に來たのは、「あゝ、あの子も今日迄育ち、殊に非常に丈夫によく太つて、多くの人々に愛され、なつき仕て來たが、この電報では歸る迄生きてるか何うか分らぬ。幸に之が直つて御縁あつて法の爲めに働けるやうの身になるか。又短き生命を現じて有縁の者に契を結び、親を助けて呉れるやうになるか、それは凡夫の計らふこととて無い。それは佛がよく承知して、下さる故、死なうと生きやうと、佛のお計らひに任せ奉るより外無い」と。之が平日皆様に言ひ又頂いて居る處が茲ひと所なのである。それが親の最後の時には三日介抱し、態々病院長を呼ぶ

迄も「一分一厘思ふやうにはならぬのだ」といふ、こゝが迷ひの世界として氣をつけて來なくてはならぬ眼目の點なのである。

こゝはこの度は私は種々に考える。現に私として悲哀は何處にあるか。併し失うた者自身としては「あ失うた私の心」に在る。併し失うた者自身としては「あれがあの時あゝなつて居ればよかつたかも知れぬ、あゝ斯う」と——それが然うなつて居れば事はなかつたのであるけれども、なつて來無つた處で問題は起つて居るのである。こゝは餘り自分のこと言ひ過ぎる嫌ひがあるけれども、同じ境遇の方に聞いて頂く爲に、も少し言はせて貰ひ度い。殊に私は愚痴な人間である。あゝ斯う考えることは、いつ迄も止まぬ。それは思へるも、又思へるが最もであるが、振り反り見ると如何に思はれ、考えられやうが、人間の力では思ふやうに行き得無つた、といふ茲が肝腎の點である。茲に著しく氣をつけぬと、何程お慈悲々々と申うて居らうが、お慈悲の有難いとこが身に浸み込まぬ。それが思ふやうになる程ならば、釋尊が生老病死を哀れむ佛教をお

やら大騒ぎした最後に「あゝ、人間力では駄目だ」と、あどて思つたのであつたが、今度は一電の下に「何うなるか分らぬ」と——併しこは青年諸君にする時は、その覺悟の上から人生に出て行く行動の上に疑ひが有らうかと思ふ故、一言する。こは斯く覺悟した故、「何うならうと斯うならうと、成りやう」と投げやることは無いのである。その覺悟の上から此方の方は、生死のことは佛に任せ、この度は人間の踏むべきこと、出來得る丈けのことをどしどしやるとなるのである。それは私のこの度の場合の如き、自分の子供として愛情の上よりやらすには居られぬ。併し最後の覺悟は先きに決つて、その上から出來得る限りの人力を盡すといふ譯けてある。現に此の度び九州からの歸りの如き、私はその覺悟の上から、若し一瞬間のことと最後に間に合はぬといふやうのことがあるかも知れぬとの考えより、有らん限りの早くなる方法を取つて歸つて來た。併しこは歸ること出來ぬものなら、歸へれぬことあるかも知れぬのである。歸つて見ると

一三

一旦はそれ程心配であつたのが、一時病怠り、一箇月近くの看護することが出来たといふわけであつた。

### 七 「病」老の問題

あとより考えて見ると、その看護中も子供より幾多の教訓を受けて居ることを發見する。病苦中からもその苦を忍んで耐えて居た様子、その苦の中からも玩具を樂んで弄つて居た様子、親しき者に遇つては懐かしみ、喜んだ様子、萬事萬端頑是なき幼児の仕たことであるも、親に取つては一々教訓を遺していつて呉れたと考へることである。彌々最後になつて、快くなるか、と俟つて居たのが反對に出、兼ねて頂いて居る『歎異鈔』の第九章

久遠劫よりいままで流轉せる、苦惱の舊里はすがたなく、未だむまれざる安養の淨土は、こひしからずさふらふこと、まことによく、煩惱の興盛にさふらふにこそ。なごりあしくおもへども、娑婆の縁つきて、ちからなくしてをはるとき、かの土へはまいるべきなり。

勿論子供のこと故、信心が何やわからぬ。が如何にも生理的に次第に體力の盡くると共に、『名残惜しく思へ

たといふ次第である。これに無ければ、生、老、病、死の病、老が意味をなさぬ。故に「死」の問題にのみ業報、因縁を語るべきに非ず、「病」の上でも語らねばならぬとなるのである。殊にこの度ひ小供の病氣が如何にも快くなり得無いやうに出来て居た。その段は殆ど遺憾無しに、快くなれるもので無かつたことを感じ、『斯うも、あつても』とは思はぬで無けれども、そういふ思ひを起し得無い程にあるのである。

### 八 我が半身が往生させて貰つた思ひ

さてその「病」が彌々つものりて、『名残り惜しく思へども娑婆の縁つきて、力無くして終る時、彼の土へは參る可きなり。』——私も實地になれば何うか分らぬも、懺悔すれば、今迄人様に話しながらも、心の中に一つ淋しい處があつた。それは多くの病氣の方にも慈悲を話して、『快くならう』と思つても、なれぬのが暗である。その暗みなること、名残り惜しく思へども、娑婆の縁盡きるとゆかねばならぬことを哀み思召し下されて、その者を捨てぬとの御眞實は、その者が力無くして終る時、彼の土へは迎えとるぞとのお慈悲である』と話して、

ども……力無くして終る時云々の有様を、現じて見せて呉れた譯であつた。

猶ほ茲て一言するに、今迄は生死問題を考へて居た譯であつた。處が

釋尊は生、老、病、死と仰せられる。子供故「老」は無けれども、一方に母親が長々の老病で死に掛つて居られる。今迄はそれ見ても、左程にも思は無いで居つた譯であつたが、この度は

「病」といふことを非常に感ぜしめられた。この「病」の爲に、平日は嬉々として、愉快な性分であつたのが、哀れな有様となり、今迄は殆ど一刻もぢつとして居れ無かつたのが、ぢつとベットに寝てしまつて、よう起きぬ。如何にも「病」の様見ると、平日の「生」の状とはまるで異つた様である。自分は平生健康故、これ迄左程「病」のことは感ぜ無つたのであるが、如何にも此の度は、それを感ぜしめられた。家内の如きはそれを著しく感じて居る譯である。母の瘦せ衰へた様見ても、子供の瘦せた有様を考へ、却て子供の病に導かれて、親の老、病の苦しさを察せらるゝやうせしめられ

それで安心して

安らかな往生を遂げられた人數を知らぬ。多くの方を、よく手引きして居るのである。然るに言うて居る自分は死の經驗をせぬ。生命を保持して生きて居るの故、そのやうの場合に『あの方はあのやうにして參らせて貰はれたのに、遣つた自分はいつ迄も世に執著が止まぬ、耻しいことである』と、此方が手引きして往生された方の様を見て、

氣耻かしき思ひがあつた。又夜の寢醒めなどに、夢からさめた時など、深き穴からでも、死にそこなつて這ひ出して來たやうの心持がすることがあつて、折ふし淋しき思ひをしたことがあつたが、この度ひ子供が無常の様を示して、淨土に迎えらるゝ様を見せて呉れた時には、多年間考へて居た

死の問題が私の心でいと安い問題になつてしまつた。『あゝ斯うやつて小供が淨土に參らせて貰つた。自分初めみんなが又參らせて貰ふのである。今迄大ごとのやうに思つて居たが、あゝ斯うやつてお慈悲に迎えられる、參らせて貰ふとしてみると、左程六かしことても無いわい』と、親の時は親の參らせて貰はれる

のを、あとより見送つて、恰も極樂の部屋の戸の開かれたのをかき見たりやうの思ひであつたが、此の度には

小供に手を引かれて、半身が往生させられてしまつたやうの思ひで、聊か人情とは遠き感じを致して居るやうのことである。多くは斯ういふ時には、別れたといふ感じの方が強いが當然であるに、別れたといふよりも、一緒に附いて行つて居るやうの感じてあつて、所謂哀別離苦とは一寸異つた心持ちである。實は今朝程も友人の親の遺骸を送つて行つて、友人が遺骸を見てさへ涙ぐむて居られる。それに自分は少し横着なので無いか、と思ふ程の心が起る程に、甚だ以て私の心では淨土が近いことになつて居るのである。讃岐の庄松同行が、極樂の隣り座敷に寝て居ると言つた話をきくが、如何にも

世尊韋提希に告げたまはく、汝今知るや不や。阿彌陀佛此を去ること遠からず(觀經)

この仕方のなきを哀みお見捨て無きお慈悲を頂けば、極樂は直ぐ我が隣り境界、遠いことと無いと思はして貰ふのである。

生死即涅槃たとの意味にまで仰しやつてある。けれども淨土眞宗の様より言ふ時は、現在に於て證るとは何うしてもならぬ。處が何うもその處が、信心はこの世で得るが、眞如法性は死んでから證るのであるとやうに、かつさり仰しやつて無い。又例えば『正信偈』の

惑染の凡夫信心を發しぬれば、生死即ち涅槃なりと證知せしむ。

何うも之なども一念の立所に、直ぐ證知するが如くにある。と長々思うて居つたのであつたが、處が矢張りこれは、この度びのことと知らせて貰うたは、この世は斯く當てにならず、仕て見やうが無いが、この仕て見やう無きを憐み、お見捨て無き御眞實を頂かせて貰ふ時は、その頂いた一念が最後まで通りて、彌々名殘惜しく思へども、娑婆の縁盡きて力無くして終る時、その者がその御眞實一つて安心して、やす／＼法性常樂を證させて貰ふのである。故に生死即涅槃は矢張り一念の信心に附く。こは現に斯く仕て見やう無きを、憐み下さる御眞實を頂く時には、

九 生死即涅槃

これに就き思ふは、今迄親鸞聖人の讃文又は聖教のお示しに、何うも分りにくい處があつた。それは眞宗は御承知の如く、未來と現在をはつきり際立てる。それに聖人のお言葉では、例

えば 煩惱具足と信知して、本願力に乗ずれば、すなはち穢身すてはて、法性常樂證せしむ。

『すなはち穢身すてはて、』は疑も無く、この世の生命を終る時である。『法性常樂證せしむ』は、この肉體を終りて、彼の土で實現させて貰ふ眞證の境界に達し無い。にも係はず聖人は、『煩惱具足と信知して、本願力に乗ずれば』と、それを斯く直ぐ頂いた處へぶちつけてお出でになるの故、極言すると、この世に居ながら眞如法性を證することになるので無いかと、思はれる程にまでその處の移り具合があるのである。又例

えは 往相の廻向とくことは、彌陀の方便とさいたり、悲願の信行をしむれば、生死すなはち涅槃なり。

之なども廣大な信行を得させて貰へば、得た時が直ぐ

苦の世に在りながらいと安す／＼と安心させて貰はれること、この點寧ろ一種不思議に感ずる程なのである。それはこの世に在る限りは、何處迄も肉體を持つ仕て見やうなき人生。併しながらその苦の世にありて死んでゆく人が、このお慈悲で皆な安心して參らせて貰はれるのである。その様を多くの人様の場合に見せて貰ひ、親の時には親が參らせて貰はれる後姿を見送り、この度び小供の時には、小供に手を引かれて、自から味はしめられてみれば、如何にも『生死すなはち涅槃なり』——この度びこの點いと輕々と安らかにさせられたこと、我ながら怪しきまでに思ふことである。

一〇 彼の一生は

こは今日は色々の感想を言ふことになるが、以前からの私の友人——大學でも一緒に居て、殊に卒業後事を共に仕て來た眞岡湛海君なる人。伊勢高田派の勸學院の長をして居られた人であるが、私は久しく遇はなかつた。今夏讃岐に行く、と、あつてその方も見えるといふ話なので、私は町嚙に紹介を仕て來て置いた。處が

計らんや八月五日に、その方が亡くなつて終まはれたのである。私共の年輩の方で、殊に私とは同身一體といはんか、兄弟の如くして働いて来た間柄である。然るにその方が亡くなられたと聞けば、何とやら自分にも迫つて来たやうの感じをして居つたのであつた。處が間無しに斯く小供が死に、殊にそれが法性常樂の境を示して呉れたとなる時は、十數年前長女を失つた時の感じとは違ひ、何だか私にも亡命の時來てあつたのが、自分になり代はりて墓無くなつたのではあるまいかとやうの、凡情を起すまでに思ふことである。マア愚痴の有り丈けを聞いて頂けば、その子が余りに私によく似てた。形と言ひ所作までがよく似て居ると人の言うて下さるを聞き、親は馬鹿な者、定めてこの子が生長の後、私のやる事でもするやうになるので無いかと、思つて居つたのが、却て此方が遣り、向うが先きに往つたしてみると、何と言はんか、之は私に斯うやれ、あゝやれと、示して行つて呉れたのでは無いか。斯く思ふと近頃年寄りて聊か隱居氣味で居つた奴が、又一つ遣らして貰はんならぬかとやうにまで思ひますことである。マア様々な導きを遣して行つて呉れた。

故に「あれが生きて、斯うもあれば」と思ふ方の感は甚だ少いのである。明に彼の一生は私を導く可く現はれて来て、完全な一生を終えて還つたものと、思ふ方の感じが深いのである。

一 無垢莊嚴光

そこで先きいふ、今年の求道會では「證卷」を話し、西方寂靜無爲の樂には、畢竟逍遙として有無を離れたり。大悲心に熏じて法界に遊ぶ。分身して物を利すること、等しくして殊なること無し。云云。「證卷善導大師文」

この廣大なる眞實證の證の境界を説いてあると同時にその界に往かれた淨土往生の菩薩の方々が、この度びは衆生濟度の爲に再び人生に姿を現はし、我々に種々の手引きを仕て下さるといふ、所謂還相回向の菩薩のことを説いてあるのが「證卷」の大部分である。それは皆様が夏の時氣をつけられたか何うか。設えばそこの一箇所を拜讀して見ると、

一には一佛土に於て、身動搖せずして、十分に偏す。種々に應化して實の如く修行して、常に佛事を作す。

ひと度び極樂界に生れた處の者は、その佛土に於て再び動かぬ、而も種々に人生に應化の身を現して、常に佛事を仕て下さるとである。

………偈に安樂國は清淨にして、常に無垢輪を轉ず。化佛菩薩は日の須彌に住持するが如きの故にと言へり。諸の衆生の淤泥華を開くが故にこのたまへり。……無垢輪は煩惱の垢無き法輪である。即ち安樂國は清淨にしてその法輪を轉ぜられる。化佛菩薩はそれより現はれて人生に示現し、種々に化益して下さる有様は、日の須彌山を中心として行道するが如く、安樂國土を中心として、十方世界に顯現して下さるのであるとである。

………八地已上の菩薩は常に三昧に在つて、三昧力を以て、身本所を動せずして、能く偏く十方に至つて、諸佛を供養し、衆生を教化す。無垢輪とは佛地の功德なり。佛地の功德は習氣煩惱の垢無ず。佛諸の菩薩の爲に常に此の法輪を轉ず。諸大菩薩亦能く此の法輪を以て一切を開導して、暫時も休息無けん。故に常轉と言ふ。法身は日の如くして、應化身の光、諸の世界に徧するなり。………

日光徧きが如く應化身を現じて、濟度して下さるも力は、十方世界に徧く及んで、下さる。

………日と言ふは未だ以て不動を明すに足らず、復如須彌住持と言ふ。………

併し日といふた丈けでは、身本處を動せずして、化益して下さるのである様が表はれぬから更に日の須彌に住持するが如しと言はれたのである、この註釋である。………淤泥華とは經に言はく、高原の陸地には蓮華を生ぜず、卑濕の淤泥には乃し蓮華を生ず。此は凡夫、煩惱の泥の中に在つて、菩薩の爲に開導せられて能く佛の正覺の華を生ずるに喩ふるなり。………

こは即ち私共、子供が可哀いとか、あゝ斯う愚癡が止まぬ恩愛煩惱の泥の中に、而もそれを憐み捨てぬとのお慈悲を聞く一念に、佛正覺の華はこの恩愛煩惱の中に開いて下さる。即ち「高原の陸地には蓮華を生ぜず、卑濕淤泥に乃し蓮華を生ず」である。「和讃」には恩愛はなはだちがたく、生死はなはだつきがたし、念佛三昧行してぞ、罪障を滅し度脱せし。

この恩愛生死絶ち難き胸の中に、この斷ち難きを哀れみ見て下さる御眞實一つを頂いて、その者が安らかに

度脱を蒙る。如何にも泥中蓮華を生ずる様である。

……諒に夫れ三寶を紹隆して、常に絶えざらしむ。  
二には彼の應化身、一切の時前ならず、後ならず、  
一心一念に大光明に放つて、悉く能く偏く十方世界  
に至つて、衆生を教化し、種々に方便し、修行所作  
して、一切衆生の苦を滅除するが故に。偈に無垢莊  
嚴光、一念及び一時に、普く諸の佛會を照して、諸の  
群生を利益する故にと言へり。上に不動にして至る  
と言へり。或は至るに前後有る容し。是の故に復一  
念一時無前無後と言へる也。云云。(已上證卷論註文)  
今我が子のことを『證卷』に示される斯れに引き當  
て、言ふは、如何に信仰上として、凡夫として勝手過ぎ  
るやうにある。又

私も存命中にはそんなこと思はなかつた。が今に於て  
は子供の一生は私を導いて呉れるための無垢莊嚴光で  
あつたと、私としては深く信ぜしめられて居るとであ  
る。またこの外に今年度講本の處には慈悲門、智慧門、  
方便門その外様々の方面から、還相同向の菩薩が種々  
の姿に示現し、導いて下さることがいふてある。私に  
しては即ち亡兒が偏にその意味で出て來て呉れたもの

であつたと考へることなのである。

二 自分を捨て、佛に随ふことが難い  
これは甚だ所感を申述ることが多くなつたが猶ほ此の  
前後に拂り、有縁の方に話を聞いて頂いたこと切り無  
してあつた。殊に最近、遠地より、又近くの方で病  
氣又は私同様に子供を失つて聞きに來て下さる方が甚  
だ多かつたのである。それに就き  
人間は自分を捨て、佛に随ふといふことが甚だ爲しに  
くい。先達でも或る遠方から態々上京せられた方が言  
はれるには、自分の子供が長らく病氣で、福岡大學病院  
小兒科に入院させて居つたが、腺病質の腹水とかいふ  
病氣で、容易に直らぬ。手間が掛つて困つて居つた。  
すると大阪から來た人が、大阪によい精神療法がある  
からやれと勧められて、大阪へ連れて來ると神様を拜  
む療法である。この方は兼ねてより信仰聞いて居られ  
た人であるが、何うもそれも面はしく無いので相談に  
來たと、斯ういふのであつた。私「平日あれ程信じて居  
られた人が、何うしてそんなに迷はれたか」いふと、  
『イヤ自分は小供を快く仕度い一念てありますから』と  
斯ういふことである。私「何故又そんなことと直ると

思はれたか『イヤ澤山の實例がありますから』と、斯う

いふ答である。私「それはをかしい。設え直りたどした  
處で、此方から快く仕てほしいと頼む、此方の計らひで  
直ると思ふか』と、『イヤ諸佛菩薩は阿彌陀佛の分身で  
あらせらるゝから、分身として手を合はすはよいかと  
思ふた』と。私「それは非常な間違ひである。全體他  
方て諸佛を阿彌陀佛に歸するは、諸佛は本地阿彌陀佛  
に歸せらるゝからであるから、諸佛は阿彌陀佛の分身  
であるなど、そんなことに迷ふので無い。結局本地阿  
彌陀佛の恵みを頂けば、諸佛の本意もその本佛のお慈  
悲を知らせて下さる外に無いのだから、本地阿彌陀佛  
の恵みに随ふそれ一つとなるのである。それに貴方の  
迷はれたのは、第一貴方が自分の小供の病氣を快く仕  
度いと、自分の思惑を主とし、  
自分の思惑通りに、神や佛を自分に従はせやうとする  
からだ』と——茲は信仰上大切なるは、我々のあゝ斯  
う思ふ、  
この此方の心の思惑が間違つて居るのだといふ、こゝ  
に氣をつけ無くてはならぬ。我々があゝ斯う思ふ我が  
心の愛著で、子供の病氣がよく出來得るやうに思ふ、そこ

に間違ひがあることを目をつけねばならぬのである。

### 一三 信順隨順の意義

これは必ずしも無常のことにみに限らず、人生の事總  
てが「自分は斯う考へる、斯く仕なくてはならぬ、あ  
う斯う」と  
何處迄もそれを立て、行く、それで間違つて行く、そ  
こに注意しなくてはならぬ。先づ近頃の  
生活上の問題、社會上の問題、思想問題、勞働問題、  
世間百般の問題、皆な自分の思惑で遣り通はさうとす  
るそこに間違が起つて居るのである。處がそれが  
聖人のおほせには、善惡のふたつ、總じてもて存知  
せざるなり。そのゆへは、如來の御こゝろに、よし  
とおほしめすほどに、知りとおほしたらばこそ、よき  
をしりたるにてもあらぬ。如來のあしとおほしめす  
ほどにしりとほしたらばこそ、あしさをしりたるに  
てもあらぬ、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、  
よろづのことみなもて、そらごと、たはごと、まこ  
とあることなきに、たゞ念佛のみぞまことにておほ  
しますとこそ、おほせはさふらひしか。(歎異鈔結文)  
佛て無いのだから、本統の善し惡しは我々には分らぬ。

爾るに我々『斯うしたらよかつた、あゝ出来たらよかつた』は、自分の思惑を考へるを主にして、

佛が我々の業報、因縁を見て下さるとは分らぬから出る言となる。故にそふいふやうにあゝ斯う思ふ、それが間違ひと、茲が釘の打ち處となる。之が無いと、『けれども斯う仕度いゝ』といつても、――それは

然う仕度いゝも、そうならぬが實人生である。極言なれども今の方の如く、何とも分らぬものゝ前に、頭下げて祈つて見るやうのことが何から来るか。何とも言へぬ愛着から出て来るのである。處が又眞宗の人はそれが間違つて、現世祈禱はしてならぬからせぬと考へて居る。ならぬからせぬて無い。そういふ事をするのは入らざる計らひになるからせぬのである。處が又茲までいふと、然ういふやうに、

思ふやうにならぬ儘で捨て置くのでは安心がされぬと思ふ人があるかも知れぬ。爾らば然ういふやうに結局何處迄も思ふやうにならぬ、仕方の無い人生とのこ

考へ来る時は、即ち子供は然ういふ味ひを此の度は私に味ひ知れと氣をつけに来て呉れた佛の使であつた夢の世に仇にはかなき身を知れと教へてかへる子は知識なり。

いつも皆様を慰めた言葉は、今度は却て此方を慰めて呉れる言葉となつた譯けてある。斯くてお慈悲のましまさん限り、彼の土で待ち受けて居て呉れること、思はせて貰ふことである。猶ほ思ふことは澤山あるけれども、何やら申すには。併し一言に申せば、お慈悲の故に充分満足させられて。何やら人情としては遠いやうであるけれども、『淨土論』の中に還相回向の菩薩が

聰慧利根通敏易悟  
聰慧利根者耳善聰曰聰心明察曰慧聰察  
爽明謂之利根通敏易悟者聞表達裏謂之  
通善聽之所致照了深明謂之敏善察之所  
致遇理即解謂之易悟利根之所致

とに問題は行き詰まる。爾らば、然ういふやうに無明の暗に迷ひて、果てし無き仕方なき様であることを憐み給ひて、その者をお見捨て無き大悲の眞實は、その者を恵み、導き、その永劫の闇黒、苦惱を何處迄も和め、救はんところある佛の大慈大悲である。故に私その方に申した。貴方このお心に任かすれば、その思召に腹ふくる、故、生殺與奪を知召す處に任かせて、その中からも安んぜさせて貰ふことが出来るて無いか』と。斯く我々のして見やう無きを知召す大悲の眞實は、その者を何處迄もくゝとのお慈悲故、

本願力にあひぬれば、むなくすぐるひとぞなき、功德の寶海みちみちて、煩惱の濁水へだてなし。

如何に仕て見やう無き者も、その御眞實に腹ふかれて、私の計らひで『あゝ仕やう、斯うやらう』の思ひがなくなり、『何うならうが、斯うならうが』となつた處が、信順、隨順である。故に茲に至つて初めて心の自由平安を得させて貰ふことになる。

この世に還來して衆生を化益して下さる様をいふた言葉に  
齒林遊戯地門との言葉がある。何やら生前に子供が遊戯して居つた有様、死の際迄もおもちゃを仕て、死の期迄も母親の團扇を引きたくつて、『居無いく、パー』を仕て死んで往つて仕まうた。何やら生死煩惱の齒林に出て來て、遊戯しつゝ知らせて呉れたとやうにも思ひますことである。多大の皆様の御同情を蒙つて、感謝極りの無いこととあります。(九月七日求道會)

選擇本願の行信

「正信偈講話」三（行卷末ヨリ）

近角常觀

第一席

可知敬白一切往生人等弘擔一乘海者成就無碍無邊最勝深妙不可說不可稱  
不可思議至德何以故擔願不可思議故悲願喻如太虛空諸妙功德廣無邊故猶  
如大車普能運載諸凡聖故猶如妙蓮華不染一切世間法故如善見藥王能破一  
切煩惱病故猶如利劍能斷一切憍慢鎧故如勇將幢能伏一切諸魔軍故猶如利  
劍能截一切無明樹故猶如利斧能伐一切諸苦枝故如善知識解一切生死縛故  
猶如導師善令知凡夫出要道故猶如涌泉出智慧水無窮盡故猶如蓮華不染一  
切諸罪垢故猶如疾風能散一切諸障霧故猶如好蜜圓滿一切功德味故猶如正  
道令諸群生入智城故猶如磁石吸本願因故如閻浮檀金映奪一切有為善故猶  
如伏藏能攝一切諸佛法故猶如大地三世十方一切如來出生故如日輪光破一切

切凡愚癡闇出生信樂故猶如君王勝出一切上乘人故猶如嚴父訓導一切諸凡  
聖故猶如悲母長生一切凡聖報土真實因故猶如乳母養育守護一切善惡往生  
人故猶如大地能持一切往生故猶如大水能滌一切煩惱垢故猶如大火能燒一  
切諸見薪故猶如大風普行世間無所碍故能出三有繫縛城能閉二十五有門能  
得真實報土能辨邪正道路能竭愚癡海能流入願海乘一切知船浮諸群生海  
滿福智藏開顯方便藏良可奉持特可頂戴也

一 嚴父悲母の慈愛

一 前回「絶対不二の教機」第二席に於ては、佛の眞の眞實が我が心に徹した味に就き、申述べた次第である。初にも申した如く、今年度講本の處は如何にも意味深き故、動もすれば講本に眩惑して、肝腎の頂く可きを遺失するやうの事になり易い。故に講本につきて話すよりも、主として我が心に彌々届いて下さる點に就きて話し度いと思ふことである。

釋迦彌陀は慈悲の父母、種々に善巧方便し、われらが無上の信心を、發起せしめたまひけり。眞心徹するひとは、金剛心なりければ、三品の懺悔するひとと、ひとしと宗師はのべたまへ五濁惡世のわれらこそ、金剛の信心ばかりにて、なかく生死をすてはて、自然の淨土にいたるなれ。金剛堅固の信心の、さだまるときをまちえてぞ彌陀の心光攝護して、なかく生死をへだてける。初め四首がこれであつた。中て肝腎は初めの釋迦彌陀の讚である。

三 こは毎もいふ

嚴父慈悲の慈悲——嚴しき父の教と優さしき母の言により子供が育つ味ひである。實は昨夜の會にも多くの人が來りて、著しき徹底の告白があつた。中て一人の方が安心の所感を話された。それは私も數日前より感じられたと御様子で察して居つたのであつたが、何處で感ぜられたかと聞いたら、今の嚴父慈悲の話で慈悲に氣づかして貰うたとの話であつた。

四 それは毎度言ふ某地に、入らぬ金を費ふ子供があつた。父親が嚴しく誡めて、『何故そんな金使ふか。そんな金使つたのに、一文も拂つてやる譯は無ければ、今度丈は特別に拂ふてやるから、拂ひに行つて來い。併しそんな金拂ひに行くに汽車賃は遣れぬから歩いて行つて來い』子供は仕方無く泣く／＼出て行つたあとで母親を呼び寄せて、『お前汽車賃はやつたか。』母親が『やつたら叱られると思つてやら無つた。言はるゝのを聞くなり、馬鹿め！俺はあゝ言つたけれども子供の體で十里二十里歩いて行けると思ふか』と叱られたといふ實談である。

五 簡單なる話なれども、本來より言へば遣る可き汽車賃で無い。それになると我々

なり。

この金剛心の機となるのである。

七 而してその金剛心なりければ、『三品の懺悔するひと』、ひとしと宗師はのべたまへ。——初めて親の眞實が徹して自分の申譯け無つたのが中心より分つたのなれば、三品の懺悔する人と、等しと宗師は知らして下された。『五濁惡世のわれらこそ、金剛の信心ばかりにて』——此方は申譯けなき五濁惡の奴なれども、この親心が徹して下された一つにて『ながく生死をすてはてし、自然の淨土にいたるなれ。』『金剛堅固の信心の、ただよふとまをまをさしてぞ、彌陀の心光攝護して、ながく生死をへだてける。』——親はこの親心の届くの待ち兼ねて、その者を攝取の心光中に收め取つて下さるとである。

八 之は子供が彌々『私が悪うムりした、今迄父は嚴しく母は甘いとのみ思つて居つたのが濟みませぬでした』と、親心が徹して親の前に畏入ると、今迄長々父は嚴しく叱つて與ふべきことを知らして下され母はそのする可らざることをする者を飽く迄哀れみ、お見捨て無き親心なることを知らして下され、種々に

二六

罪があつてよいといふことは、毛頭有る可きで無いのである。さりとて子供の分際で、十里二十里歩いて行けるもので無い。即ち遣る可きで無けれども、遣つたかと陰から聞いて呉れる父母の心である。その方はこれ聞いた時、ハーツと初めて親心の有難きを知らして貰つたとの話であつた。

### 二 眞心徹到

六 即ち之が眞心徹到である——『釋迦彌陀は慈悲の父母、種々に善巧方便し、われらが無上の信心を、發起せしめたまひけり。』

『眞心徹到するひとは、金剛心なりければ』——即ちこれが徹したのが金剛心である。このある可らざる金費ひの子に飽く迄見捨て無く善く仕てやらうとの親心が、前回に申した本願一乘海を按ずるに、圓融満足極速無碍絶對不二の教なり。

この圓融満足極速無碍の教である。而して之が徹して『然ういふ親の心であつたか』と分つた處が

一 乘海の機を按ずるに、金剛の信心は絶對不二の機

善巧方便して、子供が申出るを今か／＼と待ち兼ねて居て下された親は、『あゝそうか、とうど分つて呉れたか、之で親も初めて安心満足』と、『彌陀の心光攝護して、長く生死を隔てける』攝取不捨の光明中におさめ入れて、永劫に迷はぬ者として下さる味ひである。即ち茲は佛が長々の御眞實にてその親心の程を我々に届け、届いた一念に『救異鈔』一章に彌陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、……念佛まふさんと思ひたつころのおこるとき、攝取不捨の利益にはあづけしめたまふなり。とある處の味ひである。

### 三 念佛衆生、攝取不捨

九 これは信仰上有難きことにて、これを前回の處でいふと即ち四十八對中の攝不攝對——『選擇集』に彌陀の光明は餘行の者を照さず、唯念佛の行者を攝取したまふの文。

とある處である。それは『觀經』に光明遍照、十方世界、念佛衆生、攝取不捨、とありて、彌陀の光明は他の諸善の者を攝取せぬ。

二七

唯念佛の衆生を攝取して下さるとあるのである。  
 一〇 故に申すのであるが、多くの眞宗の人が初めも終りも無くヅラ／＼に頂いて「佛は悪しても御助け」と。之は甘へた子が「親は何れ丈けても金呉れる、故に何程でも使つてよい」といふてると同じであつて、本當に親の心を頂いたならぬのである。又反對に「親に心配をかけては濟まぬ故、心配をかけるより嘘言うて置け。」と。——之も親のお心には叶はぬのである。すると我々修養々々と言つて、何處迄も自分を善く仕て親の心に叶はうとするのも、親の御本意が分つたので無ければ、何程悪くても親は／＼と言つて、何處迄も我が身の悪しさには横著て居るのも、親の御眞意に叶つた者で無い。すると何うなつたのが眞心徹到か。「この惡しさの止まぬ者を、親はその者故之を何處迄も見捨て給はざるお心か」と、これの知らされて貰へた處が念佛の衆生である。如何にも私共、この見捨て給はざる御眞意が徹した一念には、「然ういふ有難いお心であつたか」と、自ら念佛申さんと思ひ立つ心が起る。即ち親ごころを

#### 四 某高等學校教授の入信

知らされて、然うなつた處の機が念佛の衆生である。  
 一一 故に私、青年の方が「中心より親心に満足して、眞の有難い一言を言ひ度いのだが、それが言へぬ」とて、悲しまるゝのを聞くと實以て同情に堪えぬ。青年が心にも無き、口先きの念佛が言はれるもので無い。故に中心より満足した有難いの眞の念佛を、二期に一言いうて見度い。現に病氣に罹つて血を吐いて居らるゝ處の人が、血を吐く思ひで「之程になつても南無阿彌陀佛の一言の念佛が中心から言はれぬとは」と、苦まれるのである。(前々號参照) 即ち夫れ程に思はれても、その一言が稱えられぬ。處が何ぞ知らぬ、眞の思召は、それ程に仕て見やう無き、その言へぬを哀れみお見捨て無き親心であることを聞かせられると、その人が南無阿彌陀佛々々と思はず知らず念佛を稱えられたのである。

一二 いつも仙臺から道を求めて來て下さる、現時仙臺高等學校の教員を勤めて居らるゝ或方がある。昨年であつたか一昨年であつたか、著しき信仰に入られた

のであつた。帝大文科を出られた人で、この方は一方に基督教を聞きつゝ、一方に茲に來て佛教を聞いて居られたのであつた。而も露骨に言ふと耶蘇教の人達は、手取り足取り熱心に聞かす處へ私共のやり方は、さう無暗みに強いてもいかぬ故、先づ御覽の如く、聞き度い者丈け來て聞けといふ、至つて冷淡なる態度である。況や私とは言葉も交へて居らぬ。その方は心が両面になつて、基督教聞くと有難いし、佛教聞いても有難いとなつて居たのである。

一三 併しその方の最も苦まれた問題は、「人に善く向ひ度い、温かな心で向ひ度い、潤ふた心で人に接し度いと思つても、それが出來ぬ。直ぐ人に冷かになる、乾燥したカサ／＼した心になりていかぬ」と、これがこの方の苦みてあられたのであつた。處へ昨年から昨年の求道會の時に、私「我々それ程人によく向ひ度いと思つても、此方の心が斯く何處迄も冷え切つた、乾いた心故、如何に思つても何とも仕て見やうが無い。然るにその仕て見やう無い、乾いた心と成り果てた汝自身が衰れと、佛の大悲はその乾き果てた我々の心底迄を造る瀬無く思召し、お

見捨てなき御眞實である」と。このことを聞くなりぞの方は、思はず知らず未だ嘗つて稱へたこと無き念佛が一言口に飛び出したが、徹底された時だつたのである。「前日迄は自分にも、兩方聞きながらも、自分は多分基督教で安心すること、思つて居たのが、之を聞くなり有難や南無阿彌陀佛と、一言念佛が出るなり、もう佛から離れられぬことになつて仕まつた」と、この春私が病中に訪ねて來て、詳しく話して行かれたのであつた。

一四 即ち茲の味ひが眞心徹到——もうこの時は我々は「斯ういふことがあつたのか」と、唯々驚き呆れさせられて仕まふより外は無い。余りの慈悲の廣大さに思はず知らず南無阿彌陀佛と、即ち茲が「念佛まうさんとちもひたつ心のおこるとき、攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり」とある處である。「和讃」に

十方微塵世界の、念佛の衆生をみそなはし、攝取してすてざれば、阿彌陀と名づけられたまつる。とあるのも、茲の處をお知らせ下されたのである。

一五 故に亦蓮如上人の「御一代記聞書」には、

あさの御つとめに、いつゝの不思議をとくなかによ  
り、盡十方の無碍光は、無明のやみをてらしつゝ、一  
念歡喜するひとを、かならず滅度にいたらしむと候  
段のころを御法嘆のとき、光明遍照十方世界の文  
のころと、また、月かげのいたらぬさとはなければど  
も、ながむるひとのころにぞすむとあるうたをひ  
きよせ、御法嘆候。なか／＼ありがたさ、まふすば  
かりなくさふらふ。上様御立の御あとにて、北殿様  
の仰に、夜前の御法歎、今夜の御法歎とをひきあは  
せて仰候。ありがたさ／＼是非にあよばずと御掟候  
ひて、御落涙の御ことかぎりなき御ことにさふらふ。

一六『月影のいたらぬ里はなけれども、眺むる人の心  
にぞすむ』とは、極り無き盡十方無碍の光照なれども、  
彌々その月影の眞のち恵が心に届いて、思はず念佛申  
さんと思ひ立つ心の起つた時が、攝取不捨であるとの  
お知らせである。

親慈聖人の眞心徹到は、何時でも茲て言はれる。故に  
茲は大事である。今言ふ彌々此方の心に届いて下さる  
處が要點である。即ちそこが攝不攝對。——故に我々  
此方の方より念佛稱へんならぬとなつてゐる間は、まだ

かしになつて仕まつたといふが、昨夜のお話であつた  
のであつた。

一八 處で質問が出たといふは、斯く氣が附いて自分  
が悪しきばかりになり、自分も人もこの悪しき者とな  
ると、その方の言はれるには、  
國家といふ如き上より考へても、自分は悪しきものと  
丈けのことになり、その邊どんなものかといふも尋ね  
てあつたのであつた。即ち青年諸君の言葉にすると、

唯自分が悪い丈けになり、それでは  
人生に理想も向上も光りも無くなつてしまふ。唯悪い  
ものばかりでは、それでは甚だ頼み無く思ふが何うか、  
といふ問題だつたのである。之がよき尋ね故一言仕て  
置かうと思ふ。何うも午前の講話は私の言ふのを聞いて  
頂くに止まり、それが何れ程皆様の心に届いてある  
か、夜分の談話會の話と合はさぬと、充分申上げるこ  
とが出来ぬのである。

一九 そこで皆様に、この方の不審が何處に不充分的  
點があるか、よく味つて見て頂き度い。自分は斯程迄に  
悪かつたかと喫驚して悲しく思つて居る處に、その悪  
しきを捨てぬち心と聞いて、有難いと初めて安心させ

攝取不捨にはなつて居ぬ。茲は『眺むる人の心にぞす  
む』といふと『だから眺めねばならぬ』との疑ひを興  
へるか知れぬけれども、此方より眺めるに非ず、向ふ  
の月影の光に此方の心が照らさるる故に、初めて一念  
南無阿彌陀佛と、念佛申さんと思ひ立つ心が起る。そこ  
の處を取り違えぬやうに仕なくてはならぬ。以上は申  
し方がちと嚴しいやうであるも、實は  
茲の徹底味が無くては眞の安心にならぬから、昨夜初  
めの方の告白に事寄せ、已上聞いて頂いたのである。

### 五 自分が悪いばかりになりて 理想が立たぬ』といふ不審

一七 猶ほ少しく、過ぎるかも知れぬも昨夜今の方が  
又この尋ねを致されたのであつた。それはその方の言  
はれたには、善導大師の『禮讚』の文を読み、その時程  
自分の悪しきを見せられたことは無い。而して自分は  
斯れ程に悪しかつたかと思つて居る處へ、今の  
その悪しきを哀はれみ、お見捨て無き母の慈悲である  
ことを聞かされ、有難く頂いて、自分が申譯け無いば

て貰うて見たら、自分は斯ういふ悪い者であつたと、  
——即ち道樂息子が思ひ懸けなく母のお慈悲の金を渡  
され、『あゝ今迄自分が全く申譯けなかつた』と、その  
結果は全く自分が悪い丈けになり、それでは理想も  
何も無くなつてしまふ。それでは  
人間として味ひ無いことになつてしまふてないかと、  
これが甚だ結構な不審だつたのである。

二〇 何處が結構かといふに、大低の信者の方が  
信仰が分ると『もう仕てやつた』と。——現に此間も  
或る長年苦心して聞きに来て、下された方が、一點御  
慈悲の程が分ると『有難い』と。——而して直ぐ次ぎ  
には『先生、とうど遣りつけましたな』——仕舞ひに  
は手を舉げて自ら徹底したことを讚歎すると、そうい  
ふ方もあつたのであるが、これは余り感心せぬ信仰であ  
る。而るにこの方如きは、『自分が如何にも悪い。悪い  
故之を何とかせぬことにはならぬ。ならぬがこの悪し  
さで何とも仕て見やうが無い。』斯く苦んで居られた處  
に親の方より、『汝隠くしたつて皆な知つて居るぞ。そ  
の仕やうの無い汝、それ故、  
兼ねてより待ち受けて居る親で無いか。氣にするには

及ばぬ、心配せぬ。』之を知らされて『あゝ有難い』と。而して『自分は全く仕て見やうの無い者であつた、悪るかつた』と、茲でこの方のは心配抜けして、唯自分の『悪かつた』丈けが残つたことになつて居るのである。即ち親の慈悲を頂いたのが、自分の悪かつた方に出た側なのである。

### 六 此程の理想實現は無し

二一 處ては先きにも申した『講本』昨日分の處に、『亦機に就て對論するに、信疑對、善惡對、正邪對……明闇對有り。斯の義斯くの如し』。

斯くある時に皆様、  
そうなつた處の自分は、今この數ある對の、善い方の文字に附くと思はるか、惡い方の文字に附くと思はるか。惡い方に行き度く思へたらぬ處である。即ち今の方にすると『自分が全く悪かつた』と、正邪對とあれば俺は邪の方、信疑對とあれば俺は疑の方と、言は無くしてはならぬ處である。

二二 處が眞實の慈悲に夜を明けさせて貰うた處の者が、俺は疑

者なりとこのことが言へるやうになつたのが、長々の親の眞實が届き、徹底した、即ち善なり、正なり、信なりといふ如き文字を以つて表はさるゝ、金剛信の者とさせて貰うたのであつて、それより言ふ時は、これ程理想が満足出来たことは無いとなるのである。

二四 そこは私共、初めてこの佛の眞實に行き遇ひ、思召の深さが徹到して、我が身の申譯けなきが分つた一念には、佛の言葉より言ふ時は、釋尊は是れ我が善き親友なりと仰せられ、又觀音勢至はその勝友と爲りて下さるとあり、又『華嚴經』には

此の法を聞いて信心歡喜して疑ひ無き者は、速に無上道を成らむ。諸の如來と等しとなり。

斯の立派な身の上とさせて頂いたのであつて、夫れより言ふ時は、この恵み一つで、私共人生に理想實現し、人生に生れし所詮、永劫の目的を達せさせて頂くことが出来たのである。故にこの意味より言ふ時は、先きの方が『どうと遣つつけましたな』と喜ばれたも、亦無理無い處もあるのである。

### 七 二十八對

の。方。の。こ。と。が。言。は。れ。ま。す。か。何。う。か。そこは慈悲頂いた機の深信の味ひより行くと、我が身は現に是れ罪惡生死の者、邪の者、疑の者と、その考を起して來るが事實であるに係はず、今の處の御文には、『然るに一乘海の機を按ずるに、金剛の信心は絶對不  
二の機なり。』

これより言ふと一念の慈悲に夜の明けた處の機は、善なる者、正なる者、信なる者と、善い方の文字に仰しやつてあるのである。

二三 すると今の方が、自分は慈悲を知らされてから、自分は悪いばかりになりて、人生に理想も何も立た無くなつたと言はれたは、その方自身には氣が附いて居られぬのであるけれども、それ程親の慈悲の前に頭が下つて、懺悔するばかりになられたといふは、即ち眞の親の眞心がその方の心に届いたからであつて、即ち眞實の親の慈愛が分つて、『自分程申譯け無い者は無つた、悪い者は無つた』と、懺悔せらるゝその有様が、之を横より見る時は、『彼の人こそ眞に親の眞實を頂かれた人』といふことになるのである。即ち言ひ換へれば私共我が身は惡しき

二五 處が信仰には何うしても、この二つの傾きが現はれて來る。  
『あゝ惡かつた』と惡い方に眼の着く人と、『あゝ有難い』と有難い方に眼を着ける人とである。處が實はこの二つが一つ物。今この物を、斯く引き上げる方より言ふ時は、この重き物をよくも、輕々と言はなくてはならぬのであるし、上げられる物の方より言ふ時は、夫れ程に迄骨折らせた自分の方はよくせき重いと、言はなくてはならぬのである。

二六 即ち今の方はその一方、自分は悪いといふ方に  
出られた方である。その爲めこれでは理想が無くなるで無いかと迄思はれたのであるが、寧ろ斯くも慈悲の上より言ふ時は、眞の理想實現の有様が、今この方の様となるのである。即ちそれより言ふ時は、今斯程迄に懺悔せらるゝこの方の姿が、善なり、正なり、信なりとやうの言葉を以て表はさるゝ、慈悲の届いた絶對不二の機。併しては自分こそ偉いと  
自覺上力むことは無い故に、この方が理想が無くなつたまでには自分の惡しさを思はるゝ、夫れが却つて尊いことなのである。それは夫れ程迄に惡しきの知れた

のが、即ち眞の恵みを得られたからで、そこになると  
こは何處迄もお見捨て無き恵みのお力一つであること  
を忘れてはならぬのである。

二七。そこで今の信疑對、善惡對以下は、  
この慈悲の力が私共の上に届いて、その届いた現は  
れを斯くは廿八通りに言はれたもので、これは昨席にも  
申した

念佛者は無碍の一道なり。そのいはれいかんとなら  
ば、信心の行者には天神地祇も敬伏し、魔界外道も  
障碍することなし。罪惡も業報を感ずることあたはず、  
諸善もおよぶことなきゆへに、無碍の一道なり  
と云々(歎異鈔第七章)

先きいふ如く、初めて廣大の慈悲であつたと分つて、  
念佛申さんと思ひ立つ心の起つた、即ち今の恵みに徹  
した處の者が念佛者である。

二八。その念佛者には、『天神地祇も敬伏し、云々』  
番に念佛に敬伏し、尊敬するばかりでなく、  
その念佛頂いた處の者にも、天神地祇は敬伏し、魔界  
外道もその者には障碍することの出来ぬ、それ程の廣  
大なる力を蒙る處の者であるとしてある。即ち今茲もそ

### 八 無碍と徹底の味ひ

三〇。そこで之より今席の處に移りて  
『敬て一切の往生人等に白く。弘誓一乘海は無碍、無  
邊、最勝、深妙、不可說、不可稱、不可思議の至徳  
を成就したまへり。何を以ての故に、誓願不可思議  
なるが故に』

如來の廣大智慧海が弘誓一乘海である。この一乘海の  
釋は昨年度講本(即ち『行卷』今年度分の前)の處よ  
り、今年度分に續いて出て居るのである。この廣大な  
如來の『弘誓一乘海は、  
無碍、無邊、最勝、深妙、不可說、不可稱、不可思議  
の至徳を成就したまへり。』——これは聖人が恵みの極り  
無、信仰の極り無き味ひを、出来る丈け言を繰返し、  
言へる限り言葉を費して、言うて見られたものである。

三三。先づ  
無。とは私の如何なる碍、如何なる罪惡を以てしても、  
佛。大慈悲で向はる、廣大なる恵みに向ひては、  
私。如何なる惡しさを以てしても、それを妨げること  
の出来ぬ味ひである。このことは言ひ換へれば、先方

の力の私共の上に届いて、廣大なる利益を蒙らせて下  
さる、その私共の上に働き現はれて下される様を、斯く  
は二十八通りの對に擧げて示して下されたものなので  
ある。故にこれは寧ろ私共の上に届いて下される佛のお力  
の様がこの廿八對と頂く可きなのである。

二九。併しこれは他より眺めて斯く／＼の様と言ふので  
は無くして、我々一人々々がこの恵みを事實に頂き  
その頂いた味ひより出て来る處の味ひであることを氣  
を附けなくてはならぬのである。譬へば茲に一抔の水  
あり、之を飲むと冷かに透明であると、横より言うて居  
るのは何にもならぬ。自身に飲みて成る程冷かであ  
ると、自分に分つて來たので無くては何にもならぬ。

故に茲も唯  
藥の能書きと見て居るのは味ひ無いことになる。事  
實に自分に味ひて、成る程味つて見るとあゝ斯うと、  
その自身に實驗の味ひより出て来る處で、お知らせ下  
されたものなのである。これは先きの『月影の』の歌に  
しても、月影はあつても、矢張り見る人の心の中に映  
つて來なければいかぬ。故に茲は映つた處で示された  
ものであることを、能く頂かねばならぬのである。

が如何にも深い慈悲の人故、此方が如何程又向ふ心を  
持ち、  
何程呆れさそうと懸つても、何處／＼迄も呆れさせら  
れぬ人とのことである。

三三。そこで  
『呆れて呉れぬ人故、此方は如何に冷かに遣つてもよ  
い、悪しくてもよい』のならば、これでは徹底の味ひが  
無い處の言となる。如何に此方は冷かに掛つても、先  
方が飽く迄呆れさせられぬ人である爲めに、終に如何  
な罪、障りの此方も  
その罪障りをその呆れぬ慈悲の爲に奪られて仕まひ、  
如何な金費ひの横着者も、それに呆れず何處迄も金異  
れる底知れぬ親心であつた爲め、  
終に此方の方が喫驚して、呆れて仕まつて、そういふ  
ひどいことであつたかと、然うなつたのが、  
佛の無碍で此方の頭が下つたのである。之が徹底の味  
ひである。

### 九 所謂眞俗二諦の矛盾

三三。處が從來の眞宗信者の喜びが、如何なる自分の

悪しさを以ても、先方の慈悲を妨げることが出来ぬ。慈悲である爲め、終に此方の方が頭が下つて、此方が悪しさを取られてしまふといふ、茲が甚だ力無きことになつてある。彼の人は氣のよい金持ち故、如何な不義理しても向ふは憤らぬと、それ迄にしかいつて居無い。故にそれが表はれて

『何仕てもだぢ無いのだ』と。だから徹底味が無くなつて居ると申すのである。

三四 然らば成る可く『金費はぬやうにするのであるか。』——それ故從來眞宗と言ふ處の眞諦門なることが、彼の人は優しき人故、何しても呆れて呉れぬといふ丈けの意味になつて居る。さてさう言うたもの、夫れては安心が出来ぬ爲め、その下から、その親切頂けば、遠慮をし、慎まなければならぬの俗諦門になつてある。

眞宗の眞俗二諦が分らぬと言ふ人のあるは、言ふ人がその意味の二諦にとりて居るからそれになる。茲は頗る分り難い處で、一方では『何程費つても金遣らう、心配せな』併し他方では『然う聞いたら費つてはなら

ぬぞ』全體何ちらに仕てよいのか、『仕てもよい』であつて、又『仕てはならぬ』であつて、故に毫も徹底して居らぬのである。

三五 之は何うかといふに、先方は無碍の人故、何んなに私が悪しくても、何處迄も呆れるといふことが無い。故に私の方は飽く迄も横着に出て、『思ひ切り遣れ』といふ。即ち此方は何處迄も横着に出て、茲

佛と私との喧嘩は遣る丈け遣るがよいのである。處が何れ丈け遣りても道樂しても、何處迄も先方は呆れるといふことが無い。何程逆つても怒るといふことが無い。先方は飽く迄も優しき人故、『然ういふ逆ひ性の汝には、悪しさを止めよては可かぬ、遣る丈けは遣るの故、その遣るのを何處迄も見てやらう。斯く何處々々迄もの慈悲で向はれる爲め、終に最後に此方の方が喫驚して仕まつて、然ういふ廣大の慈悲であつたかと、此方の方が降参し、その何處々々迄もの慈悲の爲め、此方の抵抗性を取上げられて仕まつたのが徹底である。何うも今迄の信者の人の喜びに茲が欠けて居るやうにある。そこで一度びこの私の悪しきに何處々々迄もお呆れ下さらず、飽く迄

状態なのである。

### 一〇 相摸の無勝負状態にある信仰

三七 此は先きにも申した、昨席の血を吐いた病氣の青年の場合に於ても、『先生これ程血を吐いて居ながら、中心から一言の念佛が稱へられぬとは、何といふ情け無い自分でせう。』そう歎げくの對して私『イヤ君のそれ迄になりても、その

一言の念佛が稱へられぬ。その稱へられぬを察したぞ、それを何處迄も見てやらうとのお慈悲で無いか。』斯く何程申し聞かせても、その人『へい』と詰つて居る間はまだ徹底したものではない。そういふて居る心底は、『然う言はれるれば、有難いと念佛が出さうなもの』と之になつて居るのである。故に私『イヤ君の、夫れ程言ひ度く思はれても、その言へぬを遣る瀬無く思ふとの仰せである』と、段々言うて行くと、とうとう『先生、何だか蜘蛛の巣にでも捲き附かれたやうで、分りませぬ』と投げ出された。如何にも能く青年者の心中を言はれた言と思ふのである。

三八 處てこの『中心よりの南無阿彌陀佛が言へぬ』

お見捨て無き御眞實であることが分ると、『弘誓一乘海は、無碍、無邊……不可思議の至徳を成就したまへり。何を以ての故に、誓願不可思議なるが故に。』今迄自分の悪しさが止むの、止まぬのと、何處迄もこの恐ろしき闇黒の身で我慢張つて居つたことが申譯け無いとなる。

三六 そこでこのお慈悲に初めて頭の下つた味ひが俗諦門に表はれて、故に若しや他力の信者が、眞に徹底して行はるれば、決して斯くの如き不眞目なる世の中とはならぬ。處が今日では他力は我々の眞地目に出来ぬのをお見捨て無いの故、寧ろ不眞地目が我々の當り前のやうに思はれて居るのである。茲は寧ろ不眞地目を出られぬ人生が、救はれて眞地目になるのが、他力の他力たる點であることに氣をつけなくてはならぬ。何うしても

今日の眞宗の腐つた原因は茲に在る。併しこの原因を信仰の立場からは非難はされぬ。何故ならば、我々の如何に悪しきにも呆れて下らぬものがお慈悲である。呆れ給はぬの故、非難するといふことは無い。これは寧ろお慈悲と私共の角力に於て、まだ勝負のついて居ぬ

と泣かるゝ、「イヤその言へぬを遣る瀬無く」と申上る。斯くいつ迄も言葉の出違ひになつて切りのつかぬ、此状態を信者の言葉にすると、「私が悪うて可けませぬ」「イヤこのいかぬのを可哀相と言つて下さるのぢや」と——何んだか斯く何時迄も懸け離れて、甚だ餘地のある「此方は横着するけれども、向は呆れて下さらぬのぢや」「向は呆れて下さらぬけれども、此方はいつ迄も横着は止まぬのぢや」と、斯くいつ迄も切りのつかぬ、相撲が何處迄も無勝負の組合で續いて居る、この状態の信仰が甚だ多いのである。信者の人が「私は悪いけれども、向うは呆れて下さらぬ、けれども私は矢張り悪い」と、これが無勝負で了つてあるもの故、いつ迄も問題が解けぬのである。

三九 これは必ずしも信者に限らず、青年者でも、「自分は喜べ無い。併しこの喜べぬを見て下さるのが慈悲である」と。——現に私が苦んだ時でも、私が人に打ち解けられぬ、隔て心が止まぬ、疑ひ心がさらぬ。之さへ取れたら人に打ち融けられやうにと、そこ迄は分つて居るのであるも、その隔て心が何うしても止ま

ぬ、疑ひ心がとれぬ。

四〇 そこで親切なる友人が、「君は打ち解けられ無くても、その解けられぬのが君の病氣と、そこは能く分つて居る故、僕は何とも思はぬから」と、言うて呉れる。すると私の方は、「あゝ迄親切に言うて呉れたら、この隔てが取れさうなものなのに、けれども取れぬ」と、茲で矢張り相撲の勝負のつかぬ状態がありて、何うしても打ち融けられなかつたのである。これはこのことが實は我々の病氣の本なのである。それは人間、矢張り「人には此方から善く仕て行かねば」と、この根性があるから、これがある限りそれになる。茲はお聞き下さるに、最も大事の處なのである。

四一 これは茲にお集り下さる信者の方にしても、青年にしても「近角が徹底々々といふ、何うしてもあの状態に迄行くて無ければと、皆な最初にこの願をもちて聞きに来て、下さるのである。處が此方は「イヤその徹底出来ぬを哀はれと言うて下さる慈悲である」と申上げるも、皆様の方では之を本當と聞いて、下さらぬ。「イヤそれは徹底すべき

が普通であるも、お前が出来なければ出来ぬでもよい」と言はれるのだ。けれどもそれは向うの言はれるのであつて、此方としては徹底出来なくては——それは徹底すべきが本義故と、皆なこの腹で聞いて仕舞はれて居るのである。恰も「あの家に行くと、借金は拂ふて貰ふに及ばぬと言はれる。けれどもそれは向うが親切で言はれるのであつて、此方としては何處迄も拂ふ可きが本當故、如何に要らぬ、呆れぬと言はれても此方としては拂はなければならぬ」と、これになつて居るのである。

一一 佛本願の目的

四二 處が先方はもつと深い意味で言うて居られるのである。「汝拂ふ可きであるも、拂へ無ければ拂は無くともよい」位の、生温いことなら、此方の奴なか／＼降参はせぬのである。これは先き程の病氣の青年にしても、私が「斯く一言の念佛が言へず苦む君を遣る瀬無く言うて下さる慈悲」と言ふ。するとこれを聞いて「先生それ丈けですか」——まるで茲、口先きで出来無

くてもよい」と言はれた程にしか聞えて居るのである。

四三 けれども佛の言はれるは、それ位なことならず「もとより拂ふ可きが當然であるも、汝としては、全體拂へる拂へぬと言つて居るのが間違ひで無いか。君は貧しいのである。拂はふにも拂へぬので無いか。その拂へぬを氣の毒と見た我は、拂へいても位ひのことにあらず、此方は物賣る話を仕て居るのでは無いぞ、君は拂へても位に聞いて居るのであるも、もと／＼君が拂へる程ならば、我は初めからこの心配はせぬのである……」

四四 即ち茲いつもの大阪、岩本氏の場合にすれば、岩本氏如き人でも、一朝時非なる時は、困る時は困る。故に斯く困られたが氣の毒故、特別の友人が金出さうと言ふ話を仕て居る場合であるに、「拂へいてもよいか」などと、「でもよい」位の話では無いのである。即ち今話は、岩本氏が拂はうにも拂へず、青年が稱へやうにも稱へられず、その拂へず稱へられぬを見た處より喚發し來つた處の先方の眞實である。即ち「汝がそれ程悪しきを止めやうと

思うても、その止められぬを氣の毒と見た上は——夫れ故その汝を何處迄も救はうといふ我であるからは、貧しければ貧しき程捨てぬとあると同じく、悪しければ悪しき程何處迄も捨てぬ」と、これが佛の本願の目的である。

四五 即ちこの廣大目的の本願であるが故に、この本願の前には我等の如何なる罪業も、何等の妨げとなることが出来ぬ。如何なる罪障、如何なる疑ひ隔ても、以て障碍となることが出来ぬばかりか、却つて反對に此の慈悲の爲に、如何な我等の悪しさも、終にたぢろかされてしまつて、畏入つたのが佛の眞實が徹したものである。故に茲を頂か無くては——之が無碍の味ひである。

### 一一 汝の悪を氣にとめぬと也

四六 茲は私など、自分が知らせて貰うた時の氣持は斯うであつた。私が隔てが止まぬといふて心配する。『止まぬは、性分故悪しく思はぬ』と言つて呉れる。すると先方があれ程親切に言つて呉れるのだから、此方が有難いと隔てが取れば先方も満足ならぬも、此

隔てる悪しさを毛頭氣に仕て下さらぬ。『それ迄にある厚い思召か、あゝよくもこの隔てる者を、有難い。』と、そこで我が身は、悪しい者であつたとの機心の深信は茲で出て来る。『斯る者を御助け』は、この思ひ懸けざる御慈悲の爲め、終に此方が負かされてしまつた茲で出て来る言なのである。以上は餘りに説明的に言ひ過ぎたやうになつた。

四八 そこで先きの青年の『蜘蛛の巣に捲きつけられたやうで分らなくなつた』は、そこ迄になつてもこの慈悲が知らされぬ限り、自分の根性丈けだと、何處迄もそれになる。『論註』の文に『爾靈の自縛するが如し。』——靈になつて居るのだからそれでは可かぬ。此方は何れ程の亦向ひ根性で行くも、その性分を氣にせず飽く迄も、眞實に向つて下さるも慈悲の故に、此方の繫縛が皆な斷れてしまふ。茲が最も肝腎の處なのである。

### 一二 悲願は太虚空の如し等

四九 そこで『講本』これからの喩えの處は、この無碍のお慈悲でスルスルと綺麗に解けてしまつた處で、お示しになつてあるのである。先づ

方取れぬからいかぬと心配する。すると先方は『君の隔てる止まぬのを氣の毒と言つて居るのに、然う聞いたら止みさうのものとは要らぬことと無いか。君は止みさうなものと言ふのだけれど、此方は止まぬのが君の性と言つて居るのである。性と見た上は。何程君が隔てやうと、それを僕が意に介するものか。隔てが氣の毒とは、何程君が隔てやうがそれを氣に留めることと無。寧ろ隔てる限り、その君を何處迄も捨てぬのだ』と、そう迄言はれて、如何に隔てる者も『然ういふ有難い心であつたか』と、茲でころりと一轉したやうなものであつたと、之はあとで思つたことであつたのであつた。處が先方がこの法外れた慈悲心であることが知らされぬ限り、此方が隔てればかり居ては、向もよい氣はせまいと、此方の根性で先方を觀て居るから、之がある。

四七 故に一度びこの廣大の慈悲心であることを知らされた時には、然ういふ意外なことであつたかと宛然傘の心棒が逆に引くり返つたと同じである。今迄はそれだと言つて、こんなに隔てればかり居ては可かぬと心配して居たのが、意外にも慈悲はその私の

『悲願は喩えは太虚空の如し。諸の妙功德廣無邊なるが故に。』先き程の『此方は悪いけれども、佛は捨て、下さらぬ。佛は救つて下さるけれども、此方は矢張り悪い』と、これだと何處迄も滞つて、太虚空の如くとはゆかぬ。處が私の悪しさの限り、その者を何處迄も捨てぬとお慈悲と、之を知らされて見れば、却水の混濁汗汗として空中に彌滿する如く、妙功德廣無邊なること、虚空の如き慈悲である。

五〇 次には『猶し大車の如し、善く能く諸の凡聖を運載するが故に。』大車は大きな車である。凡夫も聖者も、善く思ふも思はぬ者も、そんなことは毫頭意に介せぬ。汝は隔てる隔てぬと、大ことのやうに言うのであるも、此方はそれ言つて居る凡聖を捨てぬ處の大車である。

『猶し妙蓮華の如し、一切世間の法に染せられざるが故に。』妙蓮華は如何なる卑濕淤泥の所に生えても、はたの穢さを以てその清かさを妨げられることが無い。その如くこの廣大のお慈悲を知らされて、衆生貪瞋癡中、能生清淨願往生心。(散善業)一度が夜を明けさせられて見れば、その一念の淨信は、如何なる我々の穢れにも穢さるゝ、といふことが無い。

五一 『善見藥王の如し、能く一切煩惱の病を破るが故に。』善見藥王は、見た程の者が衆病が悉く癒る、雪山に在る藥樹とのことである。その如く如何なる一切煩惱も、その煩惱に碍はられぬ無碍のお慈悲の前には、皆な融かされ、破られて、悉く木復させられてしまふ。『猶し利劍の如し、能く一切憍慢の鏡を斷つが故に。』此方は何處迄も邪見憍慢の惡衆生、強剛難化の鏡を落し、又向へる丈け

双向うて行くのであるも、その双向ふ限り何處迄もその者に大慈大悲で向うて下さる。利劍即是彌陀彼の慈悲の深きには、如何なる我慢の鏡も断ち破られ、閉口して、勝たれて仕まふ。

五二

『勇將の憤の如し、能く一切諸冤軍を伏するが故に。』  
『勇將の憤は、戦場てさながら勇將の憤が現はれ來つた如く、如何なる煩悩の一切諸冤軍も、この威神力の前には、皆な降伏させられて仕まふのである。』

『猶し利鋸の如し、能く一切無明の樹を截るが故に。』

利鋸はよく切れる鋸である。如何なる煩悩の葉を繁らし鬱蒼たる様を現して居る無明樹も、大慈大悲の利鋸でその根幹を截られて仕まふが故に煩悩の葉は繁りながらも、得涅槃分の仕合を得る。

『猶し利斧の如し、能く一切諸苦の枝を伐るが故に。』

利斧の斧であらゆる苦の枝を伐り下して下さる故に、我々如何なる苦を持つて行つても、このお慈悲の前には大安慰を蒙らぬといふことは無い。

一四 猶し涌泉の如し

五三

『善知識の如し、一切生死の縛を解くが故に。』  
善知識の如く能く衆生の一切生死の病根を知り、病に應じて藥を與へて下さる。故に我々初めて生死の繋縛より放たれ解脱を蒙ることを得る。『猶し導師の如し、善く凡夫出要の道を知らしむるが故に。』

『猶し導師の如し、善く凡夫出要の道を知らしむるが故に。』

ら人も濁されて仕まふと、要するに斯く

人間の交際なるものは、互に濁したり濁されたり、結局何處迄行つてもこの一つの事の反覆に過ぎぬのである。

故にこの状態に於て、我々何程心を清めやうと思つても、人間がこの互に濁し合ふ交際である限り、何處迄行つてもそのことは有りえぬこととなる。

『猶し好蜜の如し、一切功德の味を圓滿せるが故に。』

『猶し好蜜の如し、一切功德の味を圓滿せるが故に。』  
疾風の隙霧を一時に追ひ拂ふが如くである。

『猶し好蜜の如し、一切功德の味を圓滿せるが故に。』

五五 併し若しや茲にこの濁り水に向つて、清淨な涌泉が窮盡無く注ぎ込まれるとする時は、如何に濁つた泥水であらうが、終にはその綺麗な方に打ち勝たれて、綺麗な方の水に平均させられて仕まふこととなる。

即ち我々自分は何處迄も濁つた泥水で、自分からとしては一點綺麗になることは出来ぬのであるも、今廣大の恵みは、私とその泥水である限り、その水を何處々々迄も捨てぬとある清淨の涌泉である。即ち私の清められる迄、何處迄も窮盡なく智慧の水を注がれる故、終に如何に濁水の私も思召の深きに恐入つて、私の心内に他力の心水が充ち満ちて下さることとなる。

一五 猶し蓮華の如し等

五六

導師は此方を導いて下さる導き手である。その如く大悲は遣る瀬無く、何處迄も我々の出られぬ處を手をとりて導き出して下さる故に、我々出られぬ處に初めて出要の道を得させて頂くことが出来る。

五四

『猶し涌泉の如し、智慧の水を出して窮盡無きが故に。』

これはこの恵みは私の惡しき限り何處々々迄もとある、この『何處々々迄も』の仰せてある處が有難いのである。即私が常に言ふ處の譬——我々の心は濁つた水である。故にこの濁り心で人と交際する時は、高低二箇の面に盛られてある二杯の水が、管を以て通じられた時は、

互に水平面上に平均をとる如く、我々の心も同やう低き面に平均して仕まふのである。即ち此方から如何に人に善くするも向から惡しく向はるゝ時は、終に此方の同情の方がその爲に滅殺されて、此方の方も低い處に平均されて仕まふのである。我々自分はこの綺麗な心と何程力みて居つても、向から濁つた心で來られた時には、いつのまにか終に自分のその綺麗なのが汚い泥水と濁されて仕まひ、此方が濁つた心で人に向ふか

『猶し蓮華の如し、一切諸の罪垢に染せられざるが故に。』

前の『妙蓮華』は、世間の法に染まぬ方ないばれたのであるが、この蓮華の方は、我々自身の煩悩に染まぬ方を言はれたのである。

『猶し疾風の如し、一切諸の障霧を散するが故に。』

この廣大の御眞實が届いて下された一念には、今迄蔽はれて居た無明黒闇の雲霧が一時に消散して、さながら疾風の隙霧を一時に追ひ拂ふが如くである。

『猶し好蜜の如し、一切功德の味を圓滿せるが故に。』

このお慈悲を頂けば好蜜が有りとおる好味を備へて居る如く、萬徳圓滿の大慈悲にして、如何なる味もこの中から汲まれぬといふことは無い。

五七

『猶し正道の如し、諸の群生をして智城に入らしむるが故に。』  
正道が堂々と人を都に導くが如く、信心の一道は群生を導きて自然に、智慧の都城涅槃の證に入らしめて下さる。

『猶し磁石の如し、木願の因を吸ふが故に。』

磁石が鐵を吸引するが如く、佛の廣大眞實の力は木願の因——こは『和讃』に

至心信樂欲生と

不思議の誓願あらはして

十方諸有をすゝめてぞ、眞實報土の因とする。

即ち大慈大悲の木願が眞實報土の因である。即ちこの木願より來る遣る瀬無き眞實の力はこの木願の因を我等に届け、届いた一念には磁石の鐵を引く如く、永劫にこの木願の因に我等を引きつけ、離れぬやうにせしめ

で下さるのである。

## 五八

『閻浮檀金の如し、一切有爲の善を映奪するが故に。』  
閻浮檀金は閻浮檀木の名で、その木の果實の汁が水の入つて金となつたのが閻浮檀金であると書いてある。又白金の梵名だといふ説もある。要するに無上の寶石のことで、この寶石の前では如何なる寶石もその光彩を奪はれて仕まふ如く、この廣大御眞實の前には、如何なる凡夫有爲の善も、善たる意味をなさぬ。即ち夜が明けて日輪の光が有らゆる蠟燭の電燈の光を奪つて仕まふ有様で、そこは即ち『歎異鈔』一章の「本願を信ぜんには、他の善も要にあらざる、念佛にまさるべき善なき故に。惡もおそるべからず、本願をさまたぐるほどの惡なきが故に」とある處の味ひである。

『猶し伏藏の如し、一切諸の佛法を攝するが故に。』

伏藏の有りとある物を納めて居る如く、この本願一乘海は有りゆる佛法の至極にして、如何なる味ひもこの中に盡くされて居ぬといふ事は無い。

## 一六 華嚴經と大經

### 五九 次は

『猶し大地の如し、三世十方の一切如來出生するが故に。』

こは有難き喩にて茲で一寸申上げて見るに、全體茲に在る廿八句の譬は、こは

ある。それは『信卷』三信釋の處にも、彼の有名なる與諸如來等の文があり、又この『行卷』では、即ち昨年續き今年話して居る一乘海釋の初めにも、

華嚴經に言はく、文殊の法は常に爾かなり。法王は唯一法なり。一切無碍人一道より生死を出てたまへり。云々。

の文が擧げさせられてある。その如くに聖人と『華嚴經』との關係は深いのである。

六一 而してこは味ひ深きこと故、必要のないことであるも一言するに、全體

この『華嚴經』なる經は、釋尊が菩提樹下金剛寶座で成等正覺をとられた時、その廣大の證の境界を説かれた處の經である。故に菩提樹下成道後三七日の間に、釋尊が心に於て經驗せられた廣大なる法界眞如の覺の有様がその儘表はれたのがこの經である。故に人間相手に説かれたものではなくて、天上界でも何處でも、至る所で自由自在に説いてある。従つてその説法の様は何と言はんか、日月山河空に輝き、百川集つて大海に朝宗すると言つた按排に、口にも言葉にも懸らぬ廣大の

『華嚴經』の入法界品にある喩から仰しやつてあるのである。實は私も初めは『大經』極樂の様を説かれてある處に、この類の喩がある故、それだと思つて居たのであつたが、何うもそれとは違ふ。『華嚴經』のから仰しやつたものらしい。それは親鸞聖人にすれば、設ひ『華嚴經』の文でも、他方の意味で引張つて来ておいてになるの故、何も態々『華嚴經』の話をせずともこのとであるも、しかしそれには矢張り因縁があつて、『大經』と『華嚴經』との間には脈絡がある。

六〇 それは『大經』の序文に

佛華嚴三昧を得て、一切の經典を宣暢し演説す。

の文がありて、『大經』のあすこが『華嚴經』から來て居るのである。又第一『大經』の筆つきが能く『華嚴經』に似て居て、或は譯者も同じ譯者で無いかと、思はれる程にある。又聖人の學問上の經歷から見ても『華嚴經』とは大に連絡がある譯けてあつて、殊に叡山では『華嚴經』を聴きになつたと申すのである。兎に角聖人が『華嚴經』を重んぜられたことは著しきもので、それは御存知の如く『教行信證』では肝腎の處になると、この『華嚴經』を引張つて來ておいてになるのである。

境界を説かれたもので、即ちそれを形に表はして見たものが、彼の奈良の大佛である。即ちそれ程出來る限り大きなものが華嚴の境界であるとなるのである。而してその廣大の華嚴の證に行くには、如何にして入るか、それを説いたものが、その經の入法界品となるのである。

六二 その入法界品には何ががあるかといふに、即ち善財童子のことが説いてある。善財童子が有りとする五十三の智識——學者や長者や女子や童子、色々の者に遇つて、道を求めて證に入つたことが説いてある。この善財童子が有りとする者に遇つて道を求めたといふことは、こは得手に取つてならぬも、之を人生的に言ふと、我々が色々の經驗、色々の思想に接して、種々なる手引きを得、終に本願、他方に歸入する意味に取りてよい。而して『華嚴經』に於ては初めは佛は智慧の文殊、普賢の行願。——故に善財童子は初めは、文殊の智慧に隨ひ、普賢の行願によりて、求めに求めた窮極が、終に南無阿彌陀佛の一法により極樂往生を願ふと、斯ういふことに説いてあるのが『華嚴經』である。即ちそこで

『大經』が出て來ると、斯ういふことになつて居るの  
が經の順序である。故に『華嚴經』に説いてある廣大  
なる理想海の有様は、即ち一如法界の廣大なる佛の證  
りの境界のこととなり、その華嚴の境界に入る道は、  
即ち茲に『大經』の説法と、斯ういふことになるの  
である。

六三 それ故『大經』を頂くに、先づ初に佛王舍城耆闍  
崛山に在りました時、大比丘衆萬二千人と俱なりきと  
言ひ、又大乗の衆の菩薩、普賢菩薩妙德菩薩等、及び  
善思議菩薩……解脱菩薩等の諸菩薩、之が皆な  
普賢大士の徳に違つて、諸の菩薩の無量の行願を具  
し云云。

と、斯ういふ風に言うてある。即ち之が皆な廣大なる  
佛の華嚴三昧の中より現はれて來會し給ふた菩薩との  
ことである。而して之等の菩薩來會の中に於て  
爾時世尊、諸根悅豫し、姿色清淨にして、光顔巍巍  
とまします。

そこで阿難が『今日は一體如何なる譯けて』と尋ね  
申上げた時、之より説くが出世本懷どとて、お説き下さ  
れたのが『大經』の説法である。即ち斯く『華嚴經』よ

り即ちその境から此の世へ再び救ひに現はれて來る、  
之が  
還相回向と斯ういふことになるのである。

六五 處て今の『華嚴經』入法界品の中に、發菩提心  
を讚歎してある所に色々の譬喩を擧げて言うてあつ  
て、丁度二百二十一の譬が説いてある。その中適切な  
るものを、丁度廿八丈け選び出して示し下されたが  
即ち茲の廿八句の譬なのである。斯く頂さ來る時は私  
など、斯く求道會を開いて御本書を聞いて頂くといふ  
に恰ど何の御聖教を拜讀したてもなく、何等の調べを  
も仕て居らぬ。爾るに聖人の一句一言も必ず據所あ  
りて斯のやうになされてあるといふは、實に恐入つた  
次第である。

六六 處て只今の『猶し大地の如し三世十方の一切如  
來出生するが故に』——唯  
この譬文が『華嚴經』の無いといふのである。そ  
こでこの一つ文は何處から出たかといふ問題になる  
も、私は思ふに、こは  
『華嚴經』全體がこの喩えになると思ふのである。猶  
ほ申せば阿彌陀佛の本願に

りの順次脈絡がありて頂かれる處が意味深いと思ふの  
である。それ故中には言ふ人がある。『大經』の説法に  
於て五十三佛を経て法藏菩薩に移つて來る處の、あの  
五十三佛を、『華嚴經』の五十三の智識に引き當て、言  
ふ人である。併しこはつまらぬと思ふのである。

### 一七 聖人の讀經眼

六四 さて斯く味ひ來る時は『華嚴經』に説かれた處  
の、廣大なる華嚴の理想海、而してそれに入れるが南  
無阿彌陀佛の二法と、斯ういふことになる。故に天親  
菩薩は『正信偈』の文で頂けば、  
蓮華藏世界に至ることを得れば、即ち眞如法性の身  
を證せしむ。煩惱の林に遊で神通を現し、生死の藪  
に入つて應化を示すといへり。

即ちこの  
蓮華藏世界が今いふ華嚴の證の境界である。親鸞聖人  
は極樂はこの佛の廣大なる證の境界と御覽になつた。  
それ故その華嚴世界に生れることを得させて頂くと、  
『眞如法性の身を證す。』その廣大の證を身に得させて  
貰ふが故に、『煩惱の林に遊んで……應化を示すといへ

第十七の諸佛稱名の願がありて、この願から十方世界  
の無量の諸佛は現はれて、阿彌陀佛の名號を稱讚し、  
勸進して下さると申すのである。この意味からする時  
は、一切佛、一切佛教はこの本願に酬報して、現はれ  
下されたので、それよりする時は『華嚴經』に表はれ  
たる三世十方一切諸如來は、悉くこの南無阿彌陀佛よ  
り出生し給ふてあるものと頂くことが出来るのであ  
る。

六七 併し斯くの如く申上げたを以て、之で『華嚴經』  
と他力との關係を聞いたと、斯ういふ風にとつて貰つ  
てはならぬ。  
聖人は斯ういふ風の小刀細工は大のお嫌ひである。そ  
れは聖人の示し下された用文を經文的と脈追うてゆ  
くと、そこには如何にも廣い意味がある。聖人は一切  
經に説いてある處の經文、上は『華嚴經』より始め、  
下は『涅槃經』の終りに至る迄、悉く取つて皆な用ゐ  
てお出でになるのである。そこになると  
聖人の愛讀書は、この『涅槃經』と『華嚴經』と、二經で  
あると申してもよい。それは淨土の三部經が本である  
はいふ迄も無けれども、『教行信證』中に、この三經を

外にして最も用ひておいてなるは、『華嚴經』と『涅槃經』である。

六八 而して斯く『涅槃經』をお喜びになるにしても、聖人は何ういふ風に御覽になつたかといふに、『涅槃經』に説かれてある如來常住無有變易の涅槃の境界といふは、即ち『和讃』に

如來すなはち涅槃なり、涅槃を佛性と名づけたり、凡地にしてはさとられず、安養にいたりて證すべし。

廣大の恵みによりて我々が極樂に往くと、そこで得させて貰へるが涅槃の證である、斯ういふ風に御覽になつてあるのである。而して、その證から現れて十方三世の諸如來が法を説き、阿彌陀佛の本願を稱揚して下さる様が、即ち『華嚴經』の華藏世界の有様と、そこで一代佛敎は

往還二種廻向とのことになり、それ故『教行信證』中に皆なその意味で一切經を持つて來て、入出二門の御廻向を讚歎なさると、斯ういふことになつて居るのである。

六九 これは、聖人の一切經を御覽なさり方は總てが皆なこの調子で、苟も佛とあれば何處にあらうと阿彌陀

淨土の大菩提心は、願作佛心をすゝめしむ、すなはち願作佛心を、度衆生心となつけたり。

即ち『華嚴經』に説いてあるところの菩提心も、畢竟するにこの淨土の大菩提心のことであるとの見地から、即ち茲にもその菩提心を讃めてある處の喩譬をその儘持つて來て、斯くは本願一乘海を讚歎するにも用ゐなされたのである。以上はちと言ひ過ぎたやうであるも、聖人の仰しやる一言一句は、聖人は一言も説明しておいてならぬも、斯く深甚の意味合ひ存することを申し度かつたのである。

### 一八 日輪の光の如し等

七一次には

『日輪の光の如し、一切凡愚の癡闇を破して、信樂を出生するが故に我々の何處迄も愚癡暗食てあることを哀れみ、その者に飽く迄も温き心を差向け、照らして、終に信樂の信を生ぜしめて下さること、恰も日輪の光の如くである』

『猶し君王の如し、一切上乗人に勝出するが故に。』

こは何うても頂げるも今佛の木願は絶對である。この木願の君王の前には如何なる上乗人も今迄頼んで居つた自分の善を翻して、思召の深きに感泣し奉るより外は無。

佛、菩提心とあれば淨土の大菩提心と、斯く大鈍を揮はれてある處が、徹底した、有難い處であるのである。處がいつの時代でも、斯れに對してあ

斯う言ふ。設えば菩提心の問題にしても、それは如何にも普通佛敎に取りては發菩提心は求道の根底であつて、殊に『華嚴經』に於ては、この菩提心に力を入れて説かれてある。處が法然上人は『選擇集』に於て、

その菩提心を廢して、唯念佛の一法だとお説き下された。茲に於て拇尾の明慧上人はじめ當時の碩學達は、之れを彼れ是れ謂つて、終にその爲め法然上人以下の流罪が持ち上つた程のことであつた。

七〇 處が親鸞聖人は、その法然上人の廢されたは自力聖道の菩提心のことであつて、それだと、常没流轉の凡愚は、いかてか發起せしむべき。

三恒河沙の諸佛の、出世のみもとにありしとき、大菩提心をこそども、自力かなはて流轉せり。

爾るに我々の、その自力でいかぬを哀はれみ、お見捨てなき御眞實を頂くと、その頂いた信心は淨土の大菩提心であると言はれ、

『猶し嚴父の如し、一切諸の凡聖を訓導するが故に。』

『猶し悲母の如し、一切凡聖の報土眞實の因を長生するが故に。』

嚴父悲母の特別の御慈愛であることは、初めに申したが如くである。

七二

『猶し乳母の如し、一切善惡の往生人を養育し守護したまふが故に。』こは常にいふ如く一切善惡の往生人——必ずしも惡人ばかりで無く、善人が聊かの自分の善を頼みて善し惡しを言うて居る。それが畢竟暗がり、に於ける蠟燭と電燈の争ひであることを哀はれみ、その暗がりの限りその善惡の人を何處迄も護持養育し、終に木願に引き入れて下さるお慈悲である。その様さながら乳母の乳兒を養育するが如くである。

『猶し大地の如し、能く一切の往生を持つが故に。』この大地の喻えの方は『華嚴經』の中に在る。即ち若不生者の木願は、今一切善惡凡夫の往生を親こゝる一つに保持して、何處迄もとのお慈悲故、大地の萬物を持ちて危げ無き様である。

『猶し大水の如し、能く一切煩惱の垢を滌ぐが故に。』

『猶し大火の如し、能く一切諸見の薪を燒くが故に。』

『猶し大風の如し、普く世間に行せしめて碍る所無きが故に。』

大水、大火、大風と——こは一々申上る迄も無いのである。

七三

『能く三有繫縛の城を出て、能く二十五有の門を閉づ。能く眞實報土を得しめ、能く邪正の道路を辨す。能く愚癡海を竭し、能く願海に流入せしむ。一切知

船に乗せしめて、諸の群生海に浮ぶ。福智藏を圓滿し方便藏を開顯せしむ。良に奉持す可し、殊に頂戴す可き也。

三有繫縛の城は、三界の城に繫がれの我々である。この廣大念佛のお慈悲は、我々を脱れるに脱れられぬ三界業繫の鎖から切り放して、解脱を得しめて下され、

『能く二十五有の門を閉づ』——二十五有は、我々の迷界を數えると二十五通りとなる。そのどの門戸をも閉鎖して、再びどの門戸にも迷はぬ者とせしめて下され——茲てこの『能く々々』とある、この

能くは、即ち二河の譬喩で『我能く汝を護らん云々』とある、あの『能く』である。即ち何處迄も我必ず能く

の能くである。『能く眞實報土を得しめ、能く

邪正の道路を辨ず』この廣大眞實に夜を明けしめ下さる故に、今迄の残らずが凡夫有碍の善惡であつたことが分りて、初めて眞實の邪正の區別が明になり、『能く愚癡海を竭し、能く願海に流入せしむ』——何處迄も分らぬ愚癡のある限り、その愚癡海を竭して、残らず

を廣大願海に救ひ盡くして下され、『一切知船に乗せしめて』は、残らずを廣大智慧の願船に救ひ上げて

『諸の群生海に浮ぶ』——その大悲の願船遣る瀬無く群生海に浮んで救済のみ手を垂れ給ふとである。

『福智藏を圓滿し』——福智藏は六波羅密の中、布施、持戒、忍辱、精進、禪定迄を福と謂ひ、最後の智慧が智である。即ち念佛の萬德圓滿のことである。その念佛はその萬德を我々に届けて、届いた處に我々の上にその萬德を圓滿満足せしめ下され、

『方便藏を開顯せしむ』——方便藏は即ち佛のお慈悲の藏である。その藏は唯の藏で無い。藏を開いて諸の寶を届け、届いた處で初めて藏の意義が満足さるゝ處の藏である。即ち能く法藏を開きて、我々を恵みつくして、我々の上にその廣大の慈悲を實現して下さることである。

『良に奉持す可し、特に頂戴す可き也』——故にその廣大の大悲、良に奉持すべく、特に頂戴する外無いとである。(第八回夏季求道會講話第二日第一席)

## 池山氏獨譯 歎異鈔序文

序

親鸞聖人の在世を去ること遠からずして、原始眞宗の教團に於て、漸く異議の勃興を見る。而して大別二種の傾向を生ず。其一は賢善精進の相を現して、律法威儀に捕はれ、専修念佛を標榜して、往生淨土の業因なりと固執するもの、其弊たるや道場に張文をなして出入を嚴制するに至れり。其一は邪見放縱に陥りて、理解自悟を旨とし、終に罪惡を以て往生の業とし、念佛を以て墮獄の因なりと極言せしもの、如し。而して歎異鈔は實に此兩端の異議を歎きて、本願他力の意趣を闡明し、信願無疑の眞心を發露して、念佛成佛是眞宗の骨髓を顯揚したるものと謂ふべし。蓋し如信上人鸞聖人の禪牀に侍するの日、唯圓大德亦座に在り、疑を聖

人に質し、又親しく慈誨を蒙る。善惡二業の教の如き特に著しきもの、後年覺如上人亦大德に就て、此等の問題を質されしといふ。而して信上人の滅後異議紛々亂れて麻の如し。此に於てや大德慨然老を忘れ、上人口傳の眞信の湮滅せんことを憂へ、後學相續の疑惑なからしめんが爲に、有縁知識の教を筆にせられしものなるべし。宜哉此鈔を繙くもの、髣髴として溫潤玉の如き聖人の面授を蒙るが如く、亦勃々として赤誠火の如き大德の念力に壓せらるゝの感あること。吾人此鈔を通じて『教行信證』の祖意を感得すること鮮からず。現時原始眞宗の信仰の潑刺たるを味ふことを得る、實に本鈔の賜也。

方今宇内思想問題紛糾して、混亂底止する所を知らず、世界の動亂之が爲に劇甚其極に達せんとす。此間に立て徹底したる信念を樹立して、絶對の大道を光闡するに非んば、人類の終歸、萬國の極宗、其れ何の處にか之を求めむ。今や殘忍酷烈なる軍國主義は一時沒

落せるが如しと雖、邪見放縱なる過激思想は頭を擡げ  
來らんとし、正義人道の名を以て賢善精進の相を現す  
と雖、結局律法嚴制の下に世界を桎梏せんとするに外  
ならず。此に於てや善惡是非の見殆んど拾收すべから  
ず。聖德太子十七憲法に曰く、人皆有心、心各有執、

彼是則我非、我是則彼非、我必非聖、彼必非愚、共是  
凡夫耳、と。本鈔亦始終を通じて、凡夫善惡の心を廻  
へして、本願の大智海に歸入することを極説せざるは  
なし。今や國際聯盟、對獨講和の問題、是非紛々とし  
て彼我爪牙を磨くの時、偶々本鈔の獨譯成る。蓋し偶  
然にあらざるべし。

池山榮吉君は人格至誠の人、嘗て本山の命を奉じ、  
泰西の政教及思潮を視察する三年、予行を同ふして交  
兄弟の如し。亦君本鈔によりて信仰を獲得し、法悦の  
念に堪へず。寤寐稱名の聲を絶たず。今や洗練熟達し  
たる獨語を以て本鈔を翻譯し、以て世界思想界に紹介  
せんとす。洵に是如來の教法を十方衆生に説きさかし

むる祖意を徹底し奉るものと謂つべし。君信友たるの  
故を以て序を予以徴す。予固辭するも聽かず。乃ち所  
懐を披瀝して大業の勞苦を感謝すと云爾。

大正八年五月十二日

近角常觀識

●親鸞聖人「御消息集」に言はく

「淫じさふらふところは御身にかぎらず、念佛まふさん人々は、わが御  
身の料はおぼしめさずとも、朝家の御ため國民のために、念佛をまふ  
しおぼせたまひさふらふは、めてたふさふらふべし。往生を不定にお  
ぼしめさん人は、まづわが身の往生をおぼしめして、御念佛さふらふ  
べし。わが御身の往生一定とおぼしめさん人は、佛の御恩をおぼしめ  
さんに、御報恩のために、御念佛さふらふべしとぞおぼえさふらふ。よく  
穩なれ佛法ひろまればしとおぼしめすべしとぞおぼえさふらふ。よく  
えすさふらふ」と。

念佛のことにつき、訴えを生じた時に下し給ひし御消  
息と承はることである。現下頻に紛糾せる社會問題、  
思想問題に對しても我等としては外に言ふ可きを知ら  
ぬ。如何なることありても凡夫善惡の計らひを根底と  
したる主張によりて、解決がありえやうとは思へぬの  
である。唯仰ぐ處は我等の罪惡を何處迄も見捨て給は  
ざる唯佛與佛の知見である。念佛無碍の一道である。

雜誌値上廣告

本誌は昨年再發行後も従前來の定價を支持して來  
ました。が、一昨年來の世界戰亂による紙價暴騰に加  
へ、殊に今年初來の社會事情の變遷に伴ふ印刷製本  
工賃の大暴騰にては、本誌の如き特殊雜誌は殊に經  
營困難の事情に立ち至つて参りました。よつて日頃  
懈意の本誌として、まことに申にくいことですが、  
本誌より斷然次記の如く定價に改正を  
加え、今後は努めて發行を完ふさせて頂き度く思ひ  
ます。何卒右事情御諒承下され、猶ほ本誌の事業を  
御助勢下され度く御願致します。

一部 郵税共廿五錢

半年分(六冊)同 壹圓參拾五錢

一年分(拾貳冊)同 貳圓五拾錢

猶ほ勝手ながら從來前金御預り致し居り候分に對し  
ては本誌以下は右改正定價に換算の上送  
らせて頂きますから合せて御諒承を願上ます。

求道發行所

懺悔錄

十一版

定價卅錢 郵税貳錢

本書には著者が人生の暗黒にぶつつかつて苦しみましたことか  
ら、それが大悲の眞實に救はれ、方向一轉の信仰生活に出させら  
れた實験から、それが王舍城悲劇、阿闍世王の煩悶得脱にあらは  
れたる佛陀大悲の眞面目であること、それらが簡明を主とし  
て、感らず本書に盡くしてあります。著者が告白書として、著書  
の信仰を理解するには最も好適であります。

人生と信仰

七版

定價四十五錢 郵税四錢

目次  
第一章 人生問題と信仰  
第二章 悲觀思想と信仰  
第三章 倫理力行と信仰  
第四章 犯罪心理と信仰  
第五章 社會問題と信仰  
第六章 國家秩序と信仰  
第七章 世界宇宙と信仰

目次示すが如き内容で、人生、信仰を外にして解決の道ある可ら  
ざることを、その信仰が實人生に及ぼし來る力の偉大なること、それ  
らを理解して下さるには本書を一讀願します。

右二書昨年來久しく品切でしたが、今回出來致しま  
した。

東京市本郷區森川町一丁目  
振替東京一六六九六番

求道發行所

近角常觀著

# 慈光錄

求道叢書  
第一編

定價八十五錢 郵稅四錢

●本書は「求道」第一卷及び第四卷に掲載せる著者が力作十一編を選びて収録刊行す

●蓋し一念徹底の信源より顯現し來る實際生活の内の風光を告白描寫せるものにして、著者が筆になるものとしては、これ迄に表はれたる中の最も心力を傾注せる文字なり

●猶ほ加賀國專光寺所藏親鸞聖人眞筆聖德太子二十句偈文を原本大コロタイプ版に附して巻頭に添付したり

## 集金郵便

●本所は「求道」前金預置讀者諸君に限り何書にても御便利集金郵便の御註文に應じます。その時は御一報下さらば、送本と同時に定價に規定の集金料金を加えたる額を、直に集金便にて御請求致します。

東京市本郷區森川町一  
振替口座東京一六六九六番

求道發行所

大正八年十月二十日發行(毎月一個廿日發行)

求道前號要目 (本年貳月發行)

徹底したる平等主義

宿業論

「歎異鈔」十三章の精神

國際的懺悔と宗教的自覺

近角常觀

近角常觀

●本誌は毎月一回二十日發行とす●誌代は總て前金御拂込みのこと●送金は成るべく振替にやらせし●郵便爲替の場合には振替局は本郷區森川町局宛のこと●郵券代用は一割増●宛名人は凡て求道發行所のこと

定價一部廿五錢  
六ヶ月分 壹圓卅五錢  
十二ヶ月分 貳圓五十錢 (郵稅不要)

大正八年十月十七日印刷  
大正八年十月廿日發行

發行所

東京市本郷區森川町一番地  
印刷人 近角常觀  
編輯人 近角常觀

求道發行所

電話(小石川一六四一番)振替(東京一六六九六番)